

第二章 作家群——葛藤と動向

一 中国当代文学管見

——一九八二年の小説について——

一

一九八二年の小説界を刺激的に要約すれば、「欲と色」ということになろう。「欲と色」という甚だ煽情的なレットテルは、煽情的なるが故に正確ではない。にもかかわらず、このレットテルに象徴されるであろう、人びとの欲望を、随分と生臭く伝えてくれているのが、一九八二年の作品群である。

しかし、このレットテルには、まだ留保条件がつく。作家たちが、人びとの「欲と色」に注目し、それを見事に形象化したという意味で使用するのではないから。

むしろ、作家たちの筆致は沈静し、斜めに構えるか一步退くか、いずれにせよ、対象から距離を置く方が多い。たとえば、李国文リグオウエンのように（「窮表姐」『小説界』二期）、某省の新進作家H君をして、これまでの農民とは違った農民が出現している。もう新しい農民像が描けなくなった。と、作者自身の本音とも言えることを表明させている。

事実、この作品は、作者のその本音らしきとまどいがおもしろいだけで、ヘミングウェイ、チエーホフ、フロイトといった外国名の虚飾が、田舎の貧乏ねえさんの形象を、中途半端なものにして、終わっている。作家たちの描く主人公の多くも、現状の矛盾にぶつかり、猪突猛進するタイプでは、もはやなくなった。元気がなくなつたと言える。

すなわち、作家の筆から逸脱している人物たちこそ、生活する人びとの欲望の事実がうかがえるのである。中国社会が随分と人間臭くなり、その欲望にうごめく生活者の体臭の前に、作家たちが呆然としてゐるかのようである。

——「傷痕」が去り、「愛情」も去つて、今は、「新人新氣風」の波が押し寄せてきている。——

(李国文「窮表姐」)

大きな変動が中国社会に起きていて、中国では相変わらず「新人新氣風」と称しているが、その変動の内容は、もはや「中国」というベールに包まれた社会一個の問題ではなく、世界各国に通用する、人びと共通の問題、つまり、世界同時性を持った問題に違いない。それを体感している作家たちは、今が試練の時とはつきり感じて、それなりの努力をしているようだが、ひとつには、生活する人びとの欲望——「欲と色」が強大すぎる。もうひとつには、「社会主義的中国」と、その「中国」の「民族的特色」を強調する圧力の前に、苦闘をしいられているようである。

二

「色」は何よりも愛情問題に表われる。遇ユイルオウ羅錦の「春天的童话」(『花城』一期)は、既婚の三十二歳の羽フエ姍セン

が、兄のことを書いた小説「過去の物語」を評価し、書き方を指導してくれた、『時報』編集者何浄ヘイゼンに、愛を寄せ失恋する話である。夫舒鳴シュメイが協議離婚に応じないため、裁判になる。訴訟中、彼女は、愛情のない結婚を終らせ、愛した人を追い求めた内容の「今日の物語」という小説を書く。夫に上告された中級裁判所では、社会効果の観点から、羽冊の意向に反して、彼女への道德的批判を含んだ、さしもどし判決が下る。これをうけて、羽冊と自分の仲が公開されることになる、小説「今日の物語」を発表させまいと、何浄は策を弄する。その策の発覚が二人の愛の破綻になるといのが、大ざっぱな筋である。

「春天的童話」は、何浄に相当する現実の新聞編集者がいたり、羽冊を墮落した女と決めつけることになった『内部参考』誌が実際にあったり、さらに、本物のラブレターを使用しているなどといった、ゴシップ的興味も多い。作品を私憤の道具にするなという意見も出た。⁽¹⁾

ここでは、主人公羽冊が、生活のために何度か身を売るに等しい結婚をしていることに注目しておこう。⁽²⁾ 羽冊は「右派」の娘であったから、事情を知らぬ遠くの農村に身売りしなければならなかった。その結婚が、羽冊の自己を圧殺してなされたものであることは言うまでもないが、結婚生活自体、都市の娘の我慢できるようなものでない。離婚するとなれば、農村には農村の特別な目がある。羽冊は農村を逃げ出して町に戻り、今度は、四級瓦工の舒鳴と、これも自己を抑圧して結婚する。救いは一間の部屋が確保できることであった。一間の部屋、つまり自分が小説を書く所でもあり、自己の城を築くことでもあり、逃げ込みの場でもある。これを得るために結婚したのだと何浄に打ちあけてもいる。また、いつも「空想の恋人」を思い描いて、現実の夫の凡庸さとの落差を埋めてもいる。こういう自覚的な女が、三十二歳になって初めて愛の対象をさがし当てたのであった。何浄は二十五歳も年上であるが、従って彼女にとって、愛に生きるとは自立的に生き

ることにほかならず、結婚という社会習慣は、附随的な、形式上のものでしかなかったらう。だが、彼女自身がかつて結婚、離婚を生活上の手段としたように、「両親の「右派」というレッテルがとれ、兄の名誉回復がなされ、彼女に「解放」をもたらした「現在」でも、生活上の手段のために結婚をする社会に変化はないし、生活上の手段のために離婚を阻止しようとする社会にも変化はない。彼女は、社会的制約の頑強さになじ伏せられて終る。

彼女のそれが果して愛情であつたかどうか。「空想の恋人」を何淨に見ていたので、愛情として交流するものを持たない、羽姍の「片思い」でしかなかつたのかもしれない。とはいえ、彼女を、自己圧殺から解放かつ苦のものが、自我の赴くままに進むことを阻止し制約するものにほかならなかつた。このことを知つた彼女の怒りだけは、確実に伝わってくる。

男女の愛情を扱ってきた作家張弦（チャンエン）の「銀杏樹」〔鍾山〕一期の話は、次のようなものである。

女性記者常雁（チャンエン）が、ある村を訪れた際、銀杏の大木があつた。その木に、一對の男女の名前が刻みつけられていた。この村の教師をしている孟蓮（モンリエン）蓮は、かつて県の大学入学資格を許婚者の姚敏生（ヤオミンシヨウ）に譲つた。彼はすっかり都会化し、卒業しても、蓮蓮のもとに戻らず、県の教育局に勤める。そして町の娘と交際して、田舎から会いに来た蓮蓮を邪魔扱いし追い払う。これに同情した常雁が、蓮蓮と敏生のいきさつを、県委書記鄭霆堅（チョンテイケン）に話すと、鄭書記は職権を使用して、蓮蓮と敏生を結婚させる。再び村にやって来た常雁の、二人の愛情は回復可能なのだろうかという思惑など気にする風もなく、目の前の蓮蓮は、今の結婚生活が幸福だと言う。彼女は、パーマをかけ、粋な服を着込んでいた。

常雁が予測する愛情のあり方を、いつも裏切つた形で、蓮蓮と敏生の二人の関係は進んだ。愛情を無視し

て、強引に結婚証を与えて解決する書記のやり方が、やはり正しかったのであろうか。書記の命令で村に戻って、蓮蓮と結婚した敏生は、家にいれば嘆息ばかりしているようであるが、結婚の実をとった孟蓮蓮の逞ましさを、むしろ、感じとるべきだろうか。常雁は、別れ行く蓮蓮の後姿から、彼女が妊娠していることを知るのであった。

同じ張弦の「回黄転緑」（『人民文学』三月号）は、女性の自立を念頭に置いて、それをパロディ化したのではないかと思われる。

ある町の文学雑誌に、自分の処女作が掲載され、一躍新進女流作家となった尹影は、その町の文芸評論家南寧に、すっかり魅せられてしまう。朴直なだけで、映画の話ひとつ語りあえない大工の夫と無理に離婚する。実家に戻ると、兄嫂たちは、この招かざる客に良い顔をしない。尹影は尹影で、これまで料理や洗濯それに子供の世話まで、夫にまかせていたので、今はすべてうまくやれず不評を買うばかりとなる。大切な作品も、第二作めがどうしても書けない。南寧への愛の告白も、一時の熱に浮かれてはダメだとはねつけられてしまう。別れてから、夜間学校で文学を勉強しているという夫の後姿を見た彼女は、過去の順調な家庭生活及び、あのように軽蔑していた夫の、生活者としての良さを見直し、夫に許しを乞おうとする。

「ノラ」は家出してからどうなったか、という問いに、きわめて世俗的な回答書を作れば、自意識ばかり高く、生活能力のない女の、それ故の、みじめったらしい結末を描くことになるのであろう。だが、この張弦の作品は、いかにもありそうな話でありながら、その「ありそう」という作爲が、登場人物に生命を与えていない。この作品には、「生活」が描かれていないと言ってもいい。

女の自立は難かしい。私に言わせれば、それは何も女とか男の性別に関わらぬことだが、この点について

の力作は、張潔の「方舟」(「收穫」二期)である。

梁倩・荆華・郁泉という三人の女の共同生活を通じて、女が一人の人間として生きていくことがいかに難かしいか、描いているのである。「離婚した女にまで、部屋がまわせられるか」という居住の問題、就職の問題、その他、入院、電話、さらには豆炭を購入するといったディテール一つ一つにまで、現在の中国社会がかかえている矛盾がこめられている。その一つ一つの矛盾は、むしろ、いつも「離婚した女」として彼女たちにのしかかってくる故に、中国社会の深刻さを透視させる。「これから結婚しようとする者にさえ、部屋がまわせられないというのに」。

彼女たちは、まず何よりも、個人としての存在を主張しているが、社会は、彼女らが制約に従っているかどうかの判定を優先させる。離婚した女など、逸脱以外の何ものでもない。

自立の証しとして愛情をとらえてきた張潔は、この作品では、へたに愛を語ることは、「社会」にからめとられてしまうにすぎないと警戒しているかのようなのである。男が支配する「社会」のもとでは、男対女という闘争図式は、それ故に必要なことであろう。そして、女性が天の半分を支える国——「中国」での、この正面切った、女性の地位についての問題提起は、称賛に値するが、強いて言えば、その図式が、いささか詩情を欠いたような気がする。

青年労働者韓希鈞の描く喬子(「霞光」『人民文学』一月号)は、寡婦になって十年、三十七歳だ。彼女はきょう、久し振りの里帰りをする。手提げ籠には、大きな饅頭がみやげとして入っている。この十年間夢中で働き、子供を女手一つで育てたが、去年、請け負った綿畑の收穫から、二百余元のボーナスが入ったのだ。勧められるままに、購買部で、ラメ入りの、明るいブルーの服を買ったが、派手だと言われることを気にし

て、着る勇氣がない。村人の目は無言の圧力を加えているのだ。そこへ、貧乏暮しのため、兄たちの結婚を優先して今まで独身でいた辛明が、ロバ車で追いかけて来た。彼女の働き振りをほめ、彼女の実家のある村の入口まで送ってやろうと言うボソボソした辛明の話から、好意を感じた喬子は、髪を梳き、朝日にキラキラするラメ入りの服を着た姿で、彼の好意を受け入れることにする。

この、さしてうまくなく、二人の愛情表現らしいものもない、パターン化した小品からも、農村における寡婦の抑圧された情況がわかるが、それよりも、

——今、ひとに嫁ぐことは、まったくメシのためでなくなつた。そして——そう、私も、他の女たちのように、一人の女としての幸福な生活のために……

と、喬子に思わせているように、女の自主的な氣運が、かすかながらも見られることに注目したいと思う。たとえ、おずおずとした目立たない言動でも、この作品では、二男三男としての男も含めて、彼らなりの意志表示が見られる。それを自立と呼ぶのは、早急にしても、自己意識のもとになるであろう、「色と欲」がうごめいているとは言えよう。

ついでに、事実はいざ知らず、少くとも当面は、生産責任制の成功によって、農村の経済が向上していることにも注意しておこう。どの作品も、いささか、急に生産が増加し、裕福になりすぎるのだが。

以上に見られる、中国の都市や農村の人物は、作品の巧拙や作者の意図の有無に関わらず、生臭いし、ふてぶてしさを備えているが故に「生きている」。また、張潔に見られるように、現在の社会矛盾下に、自覚し

た個人がいかに生きていくかという問題は、日本を含めた各国に通用する問題であると言えよう。「社会作用」と称される教育的効果に重きを置いて、中国の小説は評価されるし、この傾向はまた強くなっている。しかし、読者に、明るい展望を示すことでこと足れりとするには、あまりにも複雑で深刻な矛盾に満ちた社会が厳然と存在してしまっている。洪明は、その「現代派」と称せられるモダニストを批判した論文（論一種芸術思潮）『文芸報』十月号）中で、鄧小平の「人民は芸術を必要としているが、芸術はもつと人民を必要としている」ということばを引用している。まさに中国人民は、芸術が人民を描くことを必要としているに違いない。人民とは、矛盾に満ちた社会に生きる矛盾体としての存在そのものにほかなるまい。

三

矛盾に満ちた社会の剔抉は、梁秉堃の「誰は強者」（『劇本』一月号）や王景愚の「可口可笑」（『劇本』七月号）のような劇の方が直接的である。小説では、人物は適当に身をかまし、できるだけ矛盾に巻き込まれることを回避しようとする。矛盾を正面切つてとり上げ、解決に挺身しようとする人物が少なくなつたのである。

蔣子龍の「拜年」（『人民文学』三月号）に登場する冷占国が、事態打開のため召集した会議から、妻の病氣によつて退席せざるをえなくなつたことは、象徴的なことと言つてもいい。もう、一九七九年に同じ作者が描いた、信念と行動力を持つ、あの喬工場長のような人物はいなくなつたのである。人物がいなくなつたというより、彼をとりまく周囲が、より複雑で倦怠しているのだ。信念のみでは、工場一つ動かなくなつたのである。冷占国主任は、春節（旧正月）明けの仕事始めの日から、職場全体が生産に取り組むよう叱咤し

要求する。年末に工場長は生産額超過を見込んで、ボーナスを臨時に支給しているというのに、実際の生産量はかなり落ち込んでいるのだ。職場の者たちは、習慣としての新年の挨拶交換などをしあつて働かない。こういう非合理を認めず、自らの責任である生産高達成に使命感を抱いている冷占国は、工場全体から浮き上り、人気がない。彼とは対照的に、命令や規律だけでは、人が動かなくなつたことを知る副主任胡万通^{フワンツォン}は、普段から、人びととの関係に気を配り、つけ届けもぬかりなくやっている。しかし、栄転する工場長が、後任決定会議の席上、胡万通を推薦した時、胡万通自身が固辞したのはともかく、冷占国に反感を持つている者たちまでが、やはり、信念のある冷占国でなければ、自分たちの「長」に戴けないと意見を出し、職場をまるく治めておけば良しとする、事なかれ主義の工場長を批判するのである。

作品の結末に、何かホツとしたものを感じるが、しかし、この工場長が、自分は直接責任を持つことのない生産額をくり上げて、全員にボーナスを配つたりして、うまくたちまわり、より上級へ転出していくことには変りない。職員は職員で、それ相応のプレミアを、事あるごとに要求するのである。これは、腐蝕した社会であるかもしれない。不健全な社会であるかもしれない。しかし、である。この程度の社会の方が、より真実に近いのではなからうか。私には、まだまだ、この程度では、社会矛盾の深刻さに至っていないと思えるが、それよりも、この作品からも、人びと、というか一般大衆というべきか、とにかく中国人民が、自己の、幸福と呼ぶにはあまりにもささいな欲望の充足に、少しづつではあるが確実に、歩みはじめていることがうかがわれるではないか。上層部は、権力や地位を利用して、巨大な果実を分捕つたかもしれない。それを、人びとは見知らぬわけではない。社会の矛盾には、上も下もないのだ。欲望の充足——「欲と色」への蠕動が、自主・自由・自立の動きへと、いつ変わらないとも言えないではないか。

だが、矛盾は複雑多岐で、生活のすみずみにまで、あまりにも浸透している。許世傑「關於申請添購一把鉄壺的報告」(『北京晚報』六月九日)は、たった一つのヤカンを買うための申請書が、半年もたらい回しにされた上、担当者の責任回避から、まだ許可されない、といったことを扱ったものである。この作品は、北京の夕刊新聞の、「一分間小説」というショートショートに当たる小品の、入選作品である。「生活」の真実があるのだ。

また、一人でも表彰を受けようものなら、それがどんな職場でも、そこに居られなくなるくらいの嫉妬がある。馬本徳「女教師日記」(『奔流』四月号)は、所謂「落ちこぼれ組」のクラス担任が、地区の模範教師代表に選ばれて以来、同僚たちの中傷や嫉妬にあう、一学期間の日記である。いたたまれなくなつて、学期末に転出願いを出す、生徒たちの願いの前に、またここに残ろうと決心をする、という結末に、この作品の不誠実さがあるが、同僚の教師の言う次のことばに、注意しておこう。

——「あの頃(文革初期をさす——訳者)、私は純心で勤勉だった。生活にあこがれと進取の気が満ちあふれていた」「二人の者が世俗と抗争しようとしても、ダメなんだよ」「生活の前で、私はもう疲れてしまった。本当に、とても疲れたよ」

どうやら、人びとは、もう大情況へ足を突っ込むことをやめつつある。彼らは、勿論横にはずれたり、はみ出したりしないように、できるだけ上へ這い上ろうとしている。だが多くの者は、世俗と抗争せざるをえず、うまく立ちまわれず、陥ち込むのであろう。孫承慶・徐築敏「工蜂」(『人民文学』四月号)は、フアンユイ方育英

という女性仕入れ係が、仕事のために離婚せざるをえなくなる話である。仕入れた品物を運搬するトラックを見つかるまでに、ひと月以上もかかるのである。それを短縮するためには、相変らずの「袖の下」等々が必要なのだ。その袖の下を要求する配車係にも、下つ端役としての矛盾があることはいうまでもない。従つて、下つ端役が下つ端役そのものに、一人だけその職務に誠実に忠実に厳格にやろうとすれば、たちまち、その職場全体の嫌われ者になる（豊光「新上任的考動員」『人民文学』四月号）。逆に、コネをうまく利用し、費用の工面、送電の申請、セメントの電柱買いつけなど、手八丁口八丁の活躍をする隊長は喜ばれる（楚良「没有『負荷』的電」『長江文芸』六月号）。

この楚良が描く、主人公秦龍のいところが取材に来て、彼の記事が、国家幹部の供応問題のキャンペーンを引き起こし、悪弊が改善される、といった「おはなし」よりも、たとえば、トラック運転手が、村の接待係にそれ相応の待遇と袖の下を要求する場面に、生活の真実を感じる。秦龍が乗り出して来て、自腹を切つて事に当り、それが問題となつて、風紀がよくなったところに、「生活」の真実があるであろうか。

矯健「存錢」（『人民文学』九月号）では、公社の貯蓄所の前で物を売ったことはあつても、中に入つたことのない男が、一九八二年の早々（旧の十二月五日）、ガラスドアを押して入つたところから始まる。勿論金を預けるために入ったのである。そして、この男窩窩老漢は、百元が五年後三十九・六元の利息を生むことを知つて驚く。それならば、毎月百元貯金すれば、五年後には、毎月四十元ほどが黙つて手に入るではないか、彼は、これ以後、家族の者にも金を渡さず、しゃにむに貯金通帳を増やす。貧農周大脚の借金申し込みも、ウソをついて断わる。深夜、枕の中より取り出して通帳を数えるのが唯一の楽しみだが、村人や家族との関係は悪くなり、切りつめた生活のため病気になる、道端に倒れてしまう。幸い通りかかった周大脚

に、病院に運ばれて助かった彼は、病いが癒えると、心の中の冷たい風が吹きぬけるような感じも同時に始末すべく、貯金をすべて解約する。彼は、「たといこの身が貧しくなろうとも、心まで貧しくなつちやならぬえもの、な」と笑うのである。

しかし果して、事はそうきれいごとでいくであろうか。貧農の友情に心を取り戻す結末よりも、金が金を生むことへの驚きと、その「うまみ」を一人占めにしようと、哀切に努力する姿の方が、はるかにリアリティを持つてゐるではないか。

既に周克芹が、「山月不知心裏事」(『四川文学』一九八一年八月号、一九八一年度全国優秀短編小説選入選作品)で、各家各戸が農作物を作るようになる、人と人との関係がよそよそしくなり、集団のための仕事、無駄な事と意識されてしまう危惧を描いていた。

金河^{チンガ}「不僅僅是留窓」(『人民文学』十一月号)では、とうとう、生産隊の家畜を各家各戸に戻すことになる。生産責任制がすべての面に押し広められ、そして、それは生産高を大いに引き上げる結果をもたらしているようであるが、實際上、貧農^{イネンラオヤウ}張老疙瘩^{チンラオガダ}が言うように、「包」(請け負い)は、「分」(分配)することにほかならない。正月六日の、東北の張家溝^{チンセチンガウ}でのことである。鞏大明^{コウダイミン}という五十すぎの老書記は、自分が一途に進めてきた集団化の崩壊を、今、万感の思いで目にするのである。思えば、一九五五年の冬、人民公社化の時は、同じ場所で家畜を集団のものとするために、農民が各自連れて来たのであつた。そのふつ切れぬ気持ちに決断をつけさせるため、ドラや太鼓をたたき、爆竹まで鳴らした。以来二十五年、集団化の道をまい進して来たが、村は裕福にならなかつた。今、村人はくじ引きで、家畜を各自の家に連れ帰ることにした。突然一人の女が訴える。

「私に当たったのは、痩せこけた驢の子だ。これではやっていけない。」

彼女劉五嬸リュウウセンの夫は病気がちな上、幼い娘がいるのだ。しかし、皆は、くじで決めると決め、その引いたくじが痩せこけた驢の子であった以上、やむをえないと言う。すべての目が鞏大明に注がれた時、彼は息子の反対を封じて、自分に当たった牝牛と交換してやろうと彼女に言う。劉五嬸は皆の前で言う。

「老書記さんは、これまでみんなのために、朝早くから夜遅くまで、心をくだき身をこなにして、自分は何も取りなさらぬ。私がつと困っていたって、書記さんの牛を持っていきますかい……」

これを聞いた鞏大明も、つい目頭が熱くなるのであった。

「俺の指導に従っていたから、生活がこんなにも苦しいこの女は、怨み言をついに言わず、それどころか、俺の功德さえ覚えていて、牛を持っていけぬと言う。」

他の村人は、難題にケリがついたので、寒さの中を、心底喜んで次々去っていく。今度は、わざとらしいドラや太鼓の音もない。

農民たちは、一応生産責任制を受け入れ、一気に経済的に潤ったかのようである。経済の向上は、欲望の

多様化をきたし、そこにはまた新たな矛盾も生じてきているに違いない。金河の描く農民も、くじを引く時には明らかに、きれいなことでない計算が働いていた。

高曉声の「陳奐生包産」(『人民文学』三月号)では、陳奐生は、購買部の仕入れ係として成功してから、生産大隊でやっている工場に勤めなくなった。ここには、農業よりも、定期的に現金収入が入る労働者へのあこがれが表われている。人民公社が生産責任制をとることになって、陳奐生は悩むが、おじ陳正清に、お前はもともとそんなに能力のある男ではないではないか、とさとされ、生産責任田を請け負うことにする、という筋である。ここにも、一度金儲けの味をしめた男が、今度は政策がどう変っても損をしないようにしようとする、農民の「欲」が描かれていると言つて良いだろう。そして、この「欲」こそ、当然すぎるほどの農民の権利ではなからうか。笛の音がどんなに大きくとも、安易に踊り出さない、「生活」の真実が、ここにもあると言えよう。

李虹「寛厚の大地」(『人民文学』一月号)には、元生産隊長として文革を荷つた男が、再び陝北の村を訪れる話である。この沈衍隊長は、北京からわびを言いに来たのであるが、村人たちは、彼の文革中の行為は強制されてやったことだと知っており、むしろ、自分たちを組織して灌漑工事をしようとしたことが、今では役に立っている、逆に感謝する。当時彼がつるし上げをした農民の一人は、旧交を温めた上、ひとたばの十元紙幣を出して言う。

「わしはテレビを買いたいんだが、ここらじゃ買えねえ。嬭は、沈隊長は大幹部でいなさるし、北京ならきつと買えるだろうと言うんじゃ。まったく申しわけねえが、ひとつお世話願えねえだろうか……」

都市にせよ農村にせよ、そこに生活する人びとは、私が敢えて「欲と色」と称した如く、したたかで逞ましい。そして彼らは、経済的裕福を通じて、いやが応でも、個人のより豊かな充足を追求するようになる。「金」が、人をひとりひとりバラバラな個の次元に疎外するものとしても。

四

作家たちの手法の試みについても目を向けるべきであるが、正直言つて、今の私には、その力と余裕がない。高行健カオジンギエンの『現代小説技巧初探』など、まだ見ていない。彼には「路上」(『人民文学』九月号)という短編もある。この作品は、運転手という一種の専門家の意見を聞き入れなかった、横暴な幹部が凍死してしまうもので、チベット山中での話である。運転手に視座を据え、北京から来た幹部に対して「您」「你」「大科長」などと、呼び掛けのことばを変える。その変化によって、運転手の気持ちを一層明確にしようとしている。結果が、たまたまそうなったとしても、幹部を雪中に置き去りにして凍死させてしまうことになる話自体、それはそれで、大胆なものと言える。

最後に、王蒙ワンモンに一言触れ、試練に立たされている作家を代表させよう。

彼の「惶惑」(『人民文学』七月号)は、二十八年ぶりに「T」という都市を訪れ、ある断念をして、北京に戻る技術幹部劉俊峰リウチュンフンを描いている。自らあたたためていた「過去」は、T市そのものの変容によって霧散していく。懐旧の情の他律的な消失は、現状を甘受する免罪符になる。著名人となり、權威と権力のある彼には、可視的な現実関与の狼狽さが、休みなく襲うのであるから。だが、母ムという女性の中学教師の出現は、煩わしくもあり、貧相でもあるのに、劉俊峰の予期以上に、現実に関わってくる。自らは忘れてしまつてい

たこの「過去」は、人は「自己史」から逃がられないという認識を再認識させるものであるからだ。この認識なくして、良心はありえまい。目前の有効性の前に、懐旧の情の無用さを言いきかせつつ、今、一等車に乗っている幹部の劉俊峰に、果して、僅かに残っている良心が、その良質なものを保ったまま存続しえるであろうか。

(一九八三・二・三)

注

(1) 遇羅錦「春天的童話」については、竹内実「『春の童話』とその作者」『問題と研究』四月号に詳しい紹介と論評がある。

また、京拙「文学作品不是笈泄私憤的場所——寄語『春天的童話』的作者」(読者中来『文芸報』五月号、中岳「美的創造与芸術家的世界観——対当前少数作品創作失誤的思考」『文芸報』十一月号)などの批判がある。

(2) 主人公羽姍及び作者遇羅錦の経歴については、むしろ遇羅錦「一個冬天的童話」『当代』八〇年三期の方が詳しい。

また、所謂人身売買に相当する結婚を素材にした作品には、林丹亜「蘭溪水清清」『福建文学』六月号、青禾(木禾が正しい)「綉月女」『人民文学』八月号などがある。

(3) 張弦の作品について、私はその一部について、かつて触れたことがある。「退廃の影と闘う中国文芸界」(『東亜』一九八一年十二月号)。

二 一九八三年の文学情况雑感

——短編小説を中心に——

一

今、私は、主として一九八三年の、いくつかの短編小説に見られる傾向を素描しようと思います。

指導者がある問題について呼びかけをすると、たちまち数篇の小説がそれに応ずるという情况が、中国にあります。例えば、一九八二年の十二全大会で、鄧小平が「みずからの道を歩め」と発言してから、愛国的な小説が多くなるという情况です。

こういう情況下にあつて、いくつかの作品を任意にとりあげ、寸評を加えることが、どれだけ意義あるやり方なのか、私自身疑問に思うところがあります。むしろ、そういう社会の動きと作品、或いは文学理論と作品を、正面から関連させ追求した方がよいではないか、明解でわかりよいではないか、とも思うのですが、私にはそうした場合の、そのあまりの明解さ単純さに、かえって信用のおけないものを感じてしまうので、この一見恣意的で散漫なやり方をとりたいと思います。正直に言ってしまうえば、この方が楽なのだということ

とです。

《人民文学》八三年七月号に、「ある靴直し店の話」という短編が載っています。作者陳吉蓉は天津の女性作家だそうです。

ある町の小さな靴直し店に、陽気な若い娘吉娜がやって来ます。彼女の笑いとアイデアが店を明るくし繁盛させ、ミシンを購入することになります。ただ、そのミシン設置に際して、吉娜は、店のおやじの失敗を見つけ、彼の面子をなくしてしまいました。また、おやじの帳簿のつけ間違ひも指摘したので、おやじは吉娜を、はね上り娘めと大いに罵つてしまいます。これより吉娜は店に現われなくなり、店はまた元の陰気な職場になったという話です。

この、それほど新奇とも思えないし、意外な展開があるわけでもない、また深い洞察があるわけでもない「お話」は、一体何を語るものなのでしょう。何らかの教訓を読者に与えるには、淡白な筆致と言うほかありません。ミシンの部品を、おやじがつけ間違ひ、それを無邪気に指摘して笑う吉娜と、笑われたことによつて、ひどく面子をつぶされたと感じる老人の心理、ここにこの「お話」のリアリティがあるのですが、それ故この作品は、現在各職場の齟齬となつていゝるであろう世代間の軋轢の一コマを切りとつてきたものだと見えるのかもしれませんが。

しかし私は、偏つた読み方かもしれませんが、この作品を現在の文学界を比喻したものとして見てみました。

七八年の三中全会以後の、文学界が花開いた時期、それは、この吉娜チナというバタ臭い名前の娘の出現が象

徴していきましょう。景気が良くなつて、ミシンを新たに購入するところから鬨かりを見せます。自尊心ばかり強くて、そのくせ無能な、酒やけで鼻の赤いおやじの罵りによつて破局が来ます。ミシンを現代派文芸思潮に、おやじを指導者の文学官僚などとして見ることができましょう。この作品は、次のようなことばで終ります。

その後しばらくして、この店の入口が鮮かな赤に塗り直された。吉娜がまたこの店に来たのかどうか、それは定かではないが……

これは、入口をまっ赤に塗り直す、新たな新人作家の出現を暗示しているようで、とても興味深いと言えます。

二

一年ほど前に、李国文という作家の「貧乏従姉」（《小説界》八二年二期）という作品にふれたことがあります。主人公の某省の作家H君が、次のようなことばを漏らし、それが文壇の動きをうまく表現していたからでした。

文壇は海のようなもので、ひとつの浪につづいてまたひとつの浪が来る。《傷痕》が過ぎ去り、《愛情》も過ぎ去って、今、《新人新氣風》がまたやって来た。

この作品は、春節（旧正月）の直前に、農村にいた従姉がひよっこりH君の家へやって来ることから始まります。従姉は、自分が一時育てたことのあるH君の息子の顔を見に、自分で六元の汽車賃を払ってやって来たのです。H君夫婦の間では、彼女の突然の闖入にどう反応すべきかをめぐって、いさかいが起ります。従姉の方は、帰りの切符もちゃんと前もって買っており、H君が渡そうとしたお金など、これまでと違って目もくれず、翌日、迷惑をかけてはいけないと帰って行きます。H君は、その態度に、初めて「新人新気風」を感じるといふ作品です。

今ここでは、この作品に詳しくふれるつもりはありませんが、ただひとつだけ指摘しておきたいのは、この作品には、かなりの外国語が出てきたことです。カフカ、チエーホフ、モーパッサン、フロイト、フォークナー、ヘミングウェイなど、さらには、ハリウッド、スフィンクスそしてブラジルとウルグアイのサッカー試合まで。

これらの外国語は、殆どが外国の作家の名前で、作家であるH君の意見や感想に付随して出てくるにすぎません。知識として点綴しているわけですが、それは、H君をとりまく環境及び生活を象徴する小道具としての役割を持っています。突然の従姉の来訪を、H君夫婦はスムーズに受け入れられないのですが、その理由は、従姉の方の生活の変化や新しい態度によるというよりも、H君の家庭の変化によつていふことができます。

この時、従姉がノックもしないで部屋に入って来た。こういった山村の習慣が、また妻の拒否反応を引き起こした。

日君夫婦に代表されるのは、都会の小市民の家庭、インテリの生懸なのです。共稼ぎの夫婦と一人の子供、テレビを楽しむ夜。こういった生活のリズムばかりでなく、こちらから邪魔もしないかわりに邪魔されたくもないという態度、限度内で精一杯善意を示そうとするが長続きしない肺活量と経済力など。

ということとは、この作品がとらえた『新人新気風』は、実は農民のそれではなく、対比的に浮かび出た、町の小市民の家庭であったことを意味し、その小道具として、外国語の点綴は、八〇年代という『時』をリアルに感じさせるのに大いに効果がありました。

同じように、農村から都会の主人公のもとへ、かつて主人公の子供を育てた『阿姨』（お手伝いさん）がやって来ることから始まる、舒群「美女陳情——人と雨の物語」（『文芸』八二年五期）という作品があります。主人公の『私』は、文革後名譽回復した高級幹部です。八一年四月、停年退職し、回想録を書いて余生を送ろうとします。かつての『阿姨』が寄越すと言った、その娘が来ないうちに、『私』の奥さんが入院してしまいました。そこで人の紹介により、安徽出身の金鳳妹という十七歳の娘が『阿姨』としてやって来ます。生産責任制で、故郷は良くなったかという質問に、彼女は、しよつ中大雨が降ってダメだと言います。彼女は無断で家を出て来たので、父親がつれ戻しに来ますが、一生結婚しなくてもかまわないと言って、『私』の家に居ることになります。そこへ、元の『阿姨』の娘蓮蓮がやっとやって来ました。故郷では、雨がちっとも降らず日照り続きで作物ができない。それで来るのが遅くなったと言います。こうして、二人の娘、大雨ばかりの安徽省無為県からやって来た金鳳妹と、雨が少しも降らない河北省三河県の蓮蓮に、『私』は、国家の将来のために教育を施こし、人はきつと天に勝ち、今は、党が必ず天に勝つということを教えます。

新社会が創出した新思想新事物新気風を摂取した作品というより、旧時代が遺した古い意識、礼儀、習慣に染っている娘たちを、教育し、科学を掌握して、人が決心して全力を打ちこめば天に勝つゝという意気に燃えて、国家のために励むよう善導する作品です。

このいささか長い作品は、李国文の作品と違って、風俗を描くのではなく、小説の形式を借りて、後の世代へおくる遺言のつもりで書いたのだと、作者は「付記」で言います。そのせいもあって、二人の娘の方は、この「私」の願いに応じて作用する人形にすぎず、安直な感想と単発なことばを発するだけでした。

ここで注意しておきたいのは、この作品には、マヤコフスキーの詩の引用を除いて、ほかには外国語が出て来ないことです。礼記、班固東都の賦、太平広記、楚辞天問、琵琶記、金瓶梅詞話など、さらには毛沢東の詞「李淑一に答う」まで、すべて中国の種々雑多な詩文からの引用です。

たしかに、人が決心して全力を打ちこめば天に勝つゝというのは、古臭い常套語である。元代の劉祁が撰した『帰潜志』という史書に出ることばである。だが、党はそれを利用し、それに新しい概念、新しい生命を付与して、新しい革命用語としたのである。

中国詩文からの引用は、作品に復古的な調子を漂わせるとともに、中国には長い伝統があつて、中国独自の道を歩むことができるという、中華振興の小道具としての役割も果しています。

三

《四川文学》八三年一月号に載った、高纓「朝に辞す白帝彩雲の間」は、中華大地の誇りである三峡を舞台に、女流画家史叢が、フランスの歴史家に中国画を描き、中国の伝統文化の精神を伝えるという話です。

この作品は、外国人の口から、外国は物質的で資本の論理が支配するが、中国には精神文化があると言われます。一方、劣悪な条件を強いられ、めまいまで起こした主人公が、船底の四等船室の乗客と共にいることは、人民の姿と精神をいきいきと描く根源だと答えます。

史叢がめまいを起こして倒れたと知った同室の乗客は、声を掛けたり玉子をくれたりします。彼女と同伴の若い画家は、「わが人民大衆は、こんなにも心根が温かなのに、われわれの美術学校のあのお偉ら方は、どうして氷のように冷たいんだろう。まったく癩にさわる」と言います。主人公史叢は、

言うのはおやめなさい。私はボヤキなんか聞きたくないの。あなたに望むのは、思い切った自信作、人民に面目が立つ立派な絵なのよ！

と、急いで話題を打ち切り、ボヤキをやめて立派な絵をかけと善導します。現実直視を避け、中華という觀念が先行しがちな作品と思います。

祖国の利益のために、進んで辺境へ行き、反右派闘争から文革を経て、辺境で死んだ父を称える作品「荻

「葦草」(《新港》八二年八月)を書いた鮑昌は、「麓にきらめく孤灯」(《人民文学》八三年八月)で、カザフ族の現代化のために、妻と離婚してでも、新疆の僻地で小学教師を続けようと決意する、かつて上海から知識青年として下放して来た男を描きます。今、別居中の、同じ上海知識青年の妻は、娘一人をかかえる生活に疲れ、やむにやまねず、彼に伊寧市に戻って来るか離婚するかしてくれと訴えます。主人公は、党支部書記アスムールの、三年後には良くなる、それまで辛抱してくれという頼みと、書記の娘で小学生のカミラが流す涙によつて、この地に定住する決意をします。

この、あまり説得力を持たない、短絡的な決意は、何によるものなのでしょうか。十七年前の下放の熱意と、現代化への挺身とをつなげようとするのでしょうか。

張亦嶸・張亦崢「雪原よゴビの砂漠よ」(《龍沙》八二年六期)は、文革期の青年のあの意気込みを再評価するものでした。

弟が、きょうの辺境支援動員大会で、卒業後自分も大西北(ゴビの砂漠)へ行くと言いました。同じ大学にいる兄は、驚いてやめさせようとしています。同級生は嘲笑するだけです。学科主任は、弟の優秀な論文を惜しみ、慰留させようとしています。しかし弟は、アメリカの西部開拓がそうであったように、辺境開拓は現代の青年に課せられた「事業」だと言つて譲りません。そして、大学の研究生として残ろうとしている兄に、文革期には祖国の発展のために、進んで北大荒(雪原)へ行ったのではないか、あの意気込みはウソではなかった筈だと反問します。北大荒開拓団の指導員が最後に言わんとしたことが、この祖国の大地から離れるなということばであったと、兄が思い起こした時、弟は既に出発していました。

文革期の青年の熱意を再評価し、保身出世のために大学に残りたがる青年が多いが、祖国大地の開拓という一大事業に身を投ぜよと呼びかける作品といえましょう。青年の気持ちをかかなり丁寧を描いている作品ですが、これを、同じように北大荒が出てくる、梁曉声「ここは神奇な土地なり」(《北方文学》八二年八月)と比べてみると、質の違いがはっきりすると思います。

梁曉声の作品は、文革中、北大荒に進んで開拓に行った若者たちが、自然の猛威の下に倒れていった話です。いつも先頭に立つ最も革命的な言辞を弄する女子隊員の、ふと見せたしぐさと口ずさんだ歌に、理念からでない人間的な情感を感じて、主人公はこの女子隊員を愛するようになります。しかし、若い彼らは、より革命的になるために、条件の更に厳しい奥地の開拓へ行き、次々に倒れ、この女子隊員も風土病にやられ、彼の腕の中で目を閉じます。

苛酷な自然条件下、男女四人の知識青年の愛憎が、純粹な形で展開されます。純粹故に時には無益となる、そういった人生のかなしみが、この作品にはあります。

辺境は、こういう青年たちの純粹な生の燃焼があつたが故に、祖国そのものとなるのでしょうか。こういう視点を欠くと、辺境も祖国大地の一部であると、安易に平面移動してしまふに違いありません。

孔捷生「異城の戦い」(《人民文学》八三年八月)は、かつての知識青年の転身した姿を描いた作品です。羅鉄平は、電動ミシンを作る工場長になり、仏山市の見本市へ、会計として鄭寧君、助手として美人の阿燕をつれ、売り込みに行きます。ミシンのしにせメーカーを相手に、次々にダンピングをして販路を拡大し

ます。鄭は、彼のやり方は資本主義的だと反対しますが、羅は、良い物売って幸福をもたらすのは革命の目的にかなっていると、強引に値下げを続行し、元本を割ってまで売り込みます。帰りの汽車で、われわれの勝利は、企業組織と管理の先進さによると、羅は鄭に言います。そして、今度の件で辞職せざるをえまいが、次はエアコンをやる、その気があるなら、一緒にやらないかと言います。汽車は、二人が下放棄していたことのある小さな駅に停車しました。鄭寧君は駅に下り立ち、当時の思い出にふけりますが、羅鉄平の方は、まるでこんな駅など人生になかったとでもいうように、また、行かねばならぬ前方の駅を見つめているかのように、経済学の本を読み続けます。

この作品には、革命の最終的な目的は人の幸福にあり、物質や心理上の要求を抑えるのは間違っているとして、生活の安定ではなく、一層の向上と人の全的發展のために、經濟の發展に意気を燃やす姿が描かれています。かつての知識青年の出路が、ここに示されているのでしょうか。文革の思い出に心情的に拘泥していた鄭寧君は、未来に向って目をむけている、目の前にいる彼によって、とうとう文革を過去のものとして踏ん切りをつけました。

鄧剛の「陣痛」(《鴨綠江》八三年四月)は、文革と訣別しようとする労働者を描きます。

郭大柱三十三歳は、五級リベット工です。しかし、工場が責任生産制を導入し、十人一組の班を作る時はじき出されました。彼は若くて頭が良く、政治思想が良いので、いつも先進生産者に選ばれていました。実は彼は、宣伝の仕事ばかりしていて、仕事上の技術は少しもなかったのです。五級というのも、口先だけで獲得した等級でした。さて、こうしてはじき出された者の中には、同期の劉剛炮もいます。ボロを拾い集

めて儉約につとめ、何度も表彰された阮じいさんも、はじき出された一人です。郭大柱は、結局、一から出直さなければならぬと、水汲み人となって、各職場に飲み水を配って歩きます。この時、他の労働者は、彼を同じ仲間とみなして、声を掛けるのでした。

文革からの境遇を振り捨てること、つまり文革と訣別することが、再生になることを描いています。相不変、宣伝の仕事にしがみついた劉剛砲には、もはや精彩がありません。文革の理念の一つに、肉体労働と頭脳労働の差別の解消がありました。今、この作品で、郭大柱が、文革によって得た境遇の宣伝の仕事を振り捨て、水汲みという肉体労働をすることは、文革と訣別するのではなく、まさに文革の精神の実行とも言えます。しかし、価値観の変ることが、文革との訣別を意味するとするなら、良きにつけ悪しきにつけ、生産責任制が価値観を変えつつあります。現実には、作者が郭大柱の形象で伝えようとするものとは逆に、金を得るための効率性のみを重視する観点が強まっているのではないかと思えます。

この時、阮じいさんは壁の隅に寄りそい、腹にたまった鬱憤を漏らすように小声でつぶやいた。「近頃ときたら、金、金で、人間を見やしねえ!……」

鄧剛の作品は、現実の動きをよく伝えていきます。

ついでに、《人民文学》八三年七月号に載った、邵振夫・李婉「奇妙な葬式の列」についてふれておきます。

ある水道のない辺鄙な村で、老人がロバの車を馭して、長年水を運んでいました。老人は病軀を押して水を運び、亡くなりました。老人の死を悼む人が、村の隅々から出て来て、村中の人すべてが葬式の隊列を組みました。この老人を「二等公民」とバカにしていた、二十五歳の息子が、翌日、ロバの車を馭して、村人のために水を運んだという話です。

平々凡々たる老人が、その存在がなくなることで、大きな位置を占めていたことがわかり、偉大になるという作品は、かなりあります。そういう、死んでみて偉大さに気づく話は、周囲の愚鈍さを感じさせるお話と私には思えて、あまり好きではありませんが、この作品は、息子が父の業を引き継ぐところに、現在の意義があるのでしよう。

息子が何故それを引き継ぐようになったのか、クダクダ説明しません。父親が馭者なので、ガールフレンドにも逃げられ、「よい父親」を持たなかったことに悩む息子が、こんな「二等公民」の父のために村中の人々が葬儀に参加したことに驚く、その驚きによって、父の後を継ぎます。スマートな作品と言えますが、リアリティに欠けることは確かです。

現実には、この村に給水塔を建てればよいことで、地区の主任は、老人が給水塔建設にと残したお金を息子に返して、「政府はできるだけ早く給水塔を作る」と言います。また、息子が、なまじ高校に行つたばかりに仕事がないこと、馭者のような瑣細な仕事では、四つの現代化にどれほど貢献できるというのかといった不満を漏らします。こういうことを描きながら、それらを捨象してしまいました。

同じスマートな作品でも、許世傑「いやです」(《小説界》八三年二期)は、小小説(ショートショート)

という形式のせいか、短かくて鋭いものになっていると言えます。

保育園に勤めるように勧められた、待業青年の娘が、いざとなると、保母という仕事にも足りなさを感
じて「いやです」と断わってしまいます。がっかりした園長が母親に訴えている間に、彼女は園内を散歩し
ます。すると子供たちの歌が聞こえてきました。耳をすまして聞くと、何とそれは、聞くにたえない野卑な
内容の歌で、年老いた保母さんの後について、子供たちはキャツキャツと笑いながら声をほり上げていたの
でした。彼女はこの時、国の宝である子供たちのために働こうと決意し、さあ帰ろうと催す母のことばに、
「いやです」と答えるのでした。

許世傑は、八二年六月九日の《北京晩報》に載った「あるヤカン購入申請書」で、八二年度《北京晩報》
一分間小説コンクールの一等に入賞しました。それは、ある軍隊でヤカンを購入しようとしたところ、申請
書がたらい廻しにされ、半年かかっても許可が下りないといった、官僚主義を諷刺した作品でした。「あるヤ
カン購入申請書」と、この「いやです」は、ともに良くできた作品と思いますが、現実矛盾をついた前作品
と比べると、一年の変化がよくわかると思います。

四

《人民文学》という雑誌は、八三年八月号から編集陣が入れ変り、王蒙が主任、劉劍青が副主任になりま
した。十六人の編集委員のうち十一人が変るといふ大異動があり、年齢が随分若返りました。

その八月号に、編集部「読者に告ぐ」文が、巻頭に載せられています。「文学のためばかりではない」と
題される、この文を少し訳してみます。

われわれは、《人民文学》誌をもつと良くしたい。

文学のためばかりではない。わが誌のどの号もが、十分水準に達し、鑑賞にたえる文学出版物であるようにしたい。読者に献げるものが、億万の人民の心の声であり、また、壮麗で色とりどりの、時代の絵巻図であるようにしたい。読者が、同時代人の涙と喜びと願望を見ることができるようになりたい。わが民族の苦しく且つ偉大な振興を、見ることができるようになりたい。われわれの生活、それは、波瀾万丈で多種多彩、時には重荷になりもするが、結局人をひきつけ、限りなく向上さすところの、あの生活を、見ることができるようになりたい。

偉大な祖国、偉大な歴史的使命は、精神面での更に偉大な人民を必要とする。われわれは、人民が精神面で豊かに向上するために、微力を尽くしたい。読者が、わが誌の作品から、ぬくもりと慰めと感銘と励しを、たとえ僅かでも得られるようにしたい。時には、警鐘となり衝撃となつて戦慄を引き起こす作品があるかもしれない。作品を読んだ後、読者がより良く変るようにならう。願わくば、読者が一層情熱的に勇敢に聡明になつて、各自の仕事や戦闘や生活に身を投ぜられんことを。

そこでわれわれは、特に熱烈に、国を憂い民を愁うる作品、国を利し民を益する作品を呼びかける。勇敢に人生に直面し、社会矛盾に直面して、なお且つ、共産主義の理想と信念を、執拗に追求する作品を呼びかける。われわれが歓迎するのは、何千何万の人民の運命と喜怒哀楽を共にし、血肉相連なり、肝胆相照らす作品である。われわれは、そういう作品にこそ、文学の精緻と美妙、作家の技巧と才能を見るだけでなく、躍動するまっ赤で火のような心を見るのである。

引用が長くなりましたが、この編集部のことばは、読者が読んだら一層燃えて果敢になり、賢くなつて、仕事なり戦闘なり生活に飛び込めるような、そんな作品を期待しています。そういう作品とは、国を憂い民を愁うる作品であり、国を利し民を益する作品です。勇敢に人生に直面し、社会矛盾に直面して、なお、共産主義の理想と信念を執拗に追求する作品でもあります。

ということは、当然、これまでそういう作品がなかったか、少なかったという認識に基いて言われることでしょう。国を憂い民を愁うる作品、国を利し民を益する作品が、これまでなかったか少なかった。人生や社会矛盾に勇敢に直面する作品はあったかもしれないが、共産主義の理想と信念を堅持していた作品が、これまでなかったか少なかったというわけです。この認定は、とても正確だと思います。むしろ、そういう作品ではない作品を、これまでは意図していたからです。

ここで、まことに粗雑で恐縮ですが、誤解を恐れず簡略化して、鳥瞰した見解を述べさせて頂くと、次のようになります。

ある一つの事柄（問題）をめぐる、対立する意見があつて、一方の正しい意見を、おもしろおかしく読者に説き明かしていく、これが中国現代文学の主要な方法でした。趙樹理がその代表といえます。その後、おもしろおかしく説き明かすやり方に、作家の多くの工夫と努力がなされましたが、『回想』という手段で、単に事柄の過去と現在を対比するだけでなく、心に焼きついたイメージを事柄に付与して説得力をもたせたのが茹志鵬だと私は思います。所謂四人組打倒後の文学において、中国の現代文学を大いに変え、世界同時性を持つようにさせたのは、何よりも、題材の拡大によることなのですが、また、作家の意識が解放され自由な試みの一つとして、王蒙が『意識の流れ』といわれる方法を応用し成功したことも、なおざりにできな

いと思ひます。それは、作家がこの方法によつて、直線的で継続的な「時」の束縛から脱出する術を得たと
 言えるからです。この故に、事柄に対して、教訓や解説ではない感慨と心象を持つことができた。道徳や教
 育の次元から飛翔できたと言えます。従つて、階級闘争の矛盾だけでなく、一見平凡な日常瑣事であつても、
 個人の生き方と心境に重要な意義を持つことが認められ、既成の觀念や道徳ではとらえられないところ、こ
 ざかしい作家の解決などを超えたところに、作品が成立するようになったと言えます。それ故、世界同時性
 を持つようになったし、おもしろかつたのでしよう。

勿論、王蒙一人が、また「意識の流れ」だけが、変換をなしたものではありませんが、一つの突破口を開い
 たことは確かです。一九八二年度短編小説コンクール入賞の梁曉声「ここは神奇な土地なり」や、現代文学
 に初めて出現した愛情小説と評価している、張承志「黒い駿馬」(中編、《十月》八二年六期)などは、王蒙
 の「蝴蝶」(中編、《十月》八〇年四期)や新疆の山へ老いぼれた雑種の馬に乗つて入るその間の意識を綴つ
 た「雑種の馬」(《收穫》八一年三期)などの作品なくしては、成立しなかつたでしよう。また、少女の心理
 を描き、つまらない人間でも、そういう者がいるからこそ社会は完全なものになるのではないかとつぶやく
 ような、鉄凝「ボタンのない赤いブラウス」(中編、《十月》八三年二期)も生まれなかつたであらうと思ひ
 ます。

だが、そういうふうにおもしろかつた傾向が、当の王蒙が編集長になつた《人民文学》の、編集部による
 「文学のためばかりではない」という文によつて、閉ざされようとしています。王蒙は、八二年九月の十二
 全大会後、中央委員候補という政治上高い地位につきましました。八二年十一月九日には、《小説月報》という
 雑誌の創刊三周年記念に際して、

良い文学作品は、人民の精神的力量を呼び起こし、民族の精神的力量を呼び起こす。

といったことばを贈っています。《人民文学》誌の編集者のことばと、このことばの発想が酷似していることは、言うまでもありません。

《人民文学》誌の編集者のことばは、文学という特殊な部門に限定せず、広く生活全般に効果をもたらす作品を呼びかけるものでした。社会教育的効果が、再び強調され出したのです。教育効果を上げるためには、先ず、真紅の心が、作家になければなりません。技巧や才能よりも、躍動するまっ赤で火のような心が強調されます。

そうになると、題材のとり上げ方や処理方法を制約するようになるのは、あと一步のことであるような気がします。

五

《人民文学》八三年八月号の、編集部による「文学のためばかりではない」という文では、また次のようなことも述べています。

小説面では、短かくて鋭い真の短編を特に提唱したい。同時に、長い短編や中編の作品も発表する。芸術方法の面では、革命的リアリズム文学の伝統の継承と発揚を歓迎する。同時に、われわれの文学の表現手段を一層豊富にし新しくする試みも支持し激励する。

短かくて鋭い眞の短編小説の提唱は、次号九月号の、十数篇の短編特集となります。

巻頭を飾るのは、蘇叔陽の「額縁」という作品で、次のような話です。

作家である「私」の家の窓から、通りの風景が見えます。これは額縁の中の絵のようなものです。左側に、有名な四川料理店があり、若者が酒を飲みに来ます。彼らは賭けをしては、「きまりはきまりだ、飲め」などと大声で怒鳴りあい、喧嘩を始めます。この店の前に、蚕豆さとうまめなどを売る痩せたじいさんがいます。この味は、昔とった杵柄で大変うまいと評判です。右側は小さな公園で、肥ったじいさんが自転車自轉車の番を無給でかつて出しています。このじいさんは見るからに強そうです。ある小雨の日、「私」が通りになると、ジーパンの若者がヤマハのバイクに乗ってやって来ました。「私」に泥をはねても、あやまるどころか、乱暴な言葉、横柄な態度で、バイクをぬれないように番をしておくと肥ったじいさんに命令します。まったく自分の都合しか考へません。この若者は痩せたじいさんの元の弟子で、じいさんに二瓶の酒を置き蚕豆を買って料理店へ消えます。沢山働ける者が多くの収入を得るようになり、若い弟子の方が腕の良い師匠より高給取りになったのです。じいさんは意地でもこの酒瓶を受け取ろうとしません。賭け事を始めた弟子を呼び戻し、酒と蚕豆の代金を突返して、家で勉強しろと意見して、この若者を帰らせます。バイクはと見ると、肥ったじいさんが、違法駐車として交番へまわした。あそこなら雨にぬれまい。社会のきまり通り書類を書いて受け取れと言います。「私」が家の額縁から見ると、バイクに乗った若者がじいさんに手を振って去って行きました。

すじがきだけを言うと、このように実につまらなくります。若者のふしだらな態度が、老人の社会奉仕の姿と対比して描かれ、社会のきまりを守れと主張する作品です。もともとシナリオ作家である蘇叔陽は、この作品にも、視覚的な映像の巧みさがあちこちにあるのですが、それでも、次のような描写は、効果ばか

りをねらった内容のない安直なものと言えないかと思えます。

私も家に戻って食事をすることにしよう。小学校の側を通ると、教室に明りがアカアカともつていて、中から英語を朗読する声が聞こえてきた。これは業余補習クラスだ。授業を受けているのは、四川料理店の酒客と同じ年の者たちだ。

王蒙の「灰色の鳩」(《人民文学》八三年九月)はどうでしょう。

山村から出稼ぎに出て来た二十二歳の若者が、真夏に冷たいものも飲まず大工仕事をしています。昨年は千元ためました。今年は二千元ためるつもりです。合計三千元あれば、村の娘彩雲も結婚にウンと言ってくれるかもしれません。そこへ灰色の鳩が飛んで来ました。若者は故郷の鳩を思い出しつつ、つかまえて食べようとしています。鳩は大通りへ飛んで逃げ、急停車したバスの下へもぐり込みます。若者がバスの下へもぐってつかまえようとすると、鳩は飛び去ってしまいました。バスの下から這い出た若者を、周囲の群衆は、身を挺して鳩を助けたものとみなして拍手で迎えます。『あなたって本当に素晴らしいわ』と見知らぬ少女も言います。若者は、三千元よりももっと素晴らしいことのために、泣きました。

若者が好きな故郷の娘でも、たとえ一万元を積んでも『あなたって本当に素晴らしいわ』と言う筈がないと言わんとする意図は明白です。金(物質)とそうでないものが単純に図式化されていて、何かを落としてしまったような無残な読後感が残ります。

若者の現在の生をとりまく環境そのものへの目がなくなっています。若者の苦悩が、随分おざなりな筆致

で扱われていると言えます。意図のみが躁急で内容がともなっていないとも言えます。

蕭建国の「警報器」(《人民文学》八三年九月)は、タバコ工場の若い電気工謝平が主人公です。

謝平は、タバコを箱詰めにする際、本数が足りないことを知らせる警報器を発明しました。それで生産量は増えますが、女工たちからは、労働強化になると恨まれ、この機器のネジをしょつ中ゆるめられ、故障を起こされます。この故障は誰でも簡単に直せますが、他の電気工は、謝平の作った機器の尻ぬぐいなどゴメンだと動きません。工場が、あらゆる部門で生産責任制を行うことになると、電気工たちは、自分にこの警報器の担当をまかせてくれと、謝平にいろいろな手段で近づきます。謝平は、それを断わる一方、改革はまだ始まったばかりだ。これからはもっと良い機器を作ろうと、同僚に呼びかけます。

この作品からは、ふしだらで、労働規律が弛緩し切った職場が、強く印象に残ります。いかに工場が沈滞しており、生産性が上らないかがよくわかります。主人公謝平一人が動きまわっている感じですが、それだけに主人公の熱意と呼びかけが、作者の願望(夢)にすぎないと思わせます。

田雨の「届け出」(《人民文学》八三年八月)という作品があります。

あるガラス工場が三万円の欠損を出したので、徹底的に改革することになり、王書記の支持によって、若い技術員の林明遠が工場長となりました。林は二〇%の増収を請け負います。そのために、工員全体に試験を行い、成績優秀な五十六名だけを採用することにします。その届け出締切りが近づいたのに、一番優秀な黎秀秀の届け出がまだ済んでいません。やっと来た美人は、成績最低の任萃萃と名乗ります。林明遠は、彼

女の美しさにいささか動揺しますが、規定通り、任萃萃の採用を断ります。すると彼女は、私は黎秀秀のいところであつて、黎と抱き合わせで採用するよう黎秀秀も望んでいると言つて林明遠に迫ります。前の工場長の、理想通り運営できるものかと言つたことばを思い出しながら、林がこのことも断ると、彼女は王書記の紹介状をとり出し、採用を迫ります。仕事をやるにはあんまり四角四面にやるものではない、上下の関係も大切だということばを聞きながら、林明遠は王書記へ、任萃萃採用拒否の電話をします。王書記は笑いながら、黎秀秀と相談しろと言つて電話を切つてしまいます。ほんやりしている林明遠に、実は私は黎秀秀です。あなたが本当に規定通り優秀な者だけを採用するか試してみたのです。今こそ本当に私を採用して下さいと、目の前の女が言うのでした。

これは、若い二人の男女の改革への気魄を描いた作品なのでしょう。まことにたわいのない明るい『夢』だと笑つていればいいのかもしれませんが。

韓映山「柳新秀」(《人民文学》八三年九月)は、趙家に嫁に來た柳新秀が、次々と新しいことをやり、姑を驚かせ心服させ、コンセントの一杯ある現代化した家の設計図を語るといふ話です。

ラジオ体操や入浴をとり入れるところなどに、文化に対する農村の強い憧憬を感じますが、嫁一人があんまり正しく改良をなし遂げていくと、たわいもないお話だと笑つてばかりもいられず、こういう『夢』が、夢として作用するのは、現実には劣悪な社会や醜悪な人的関係があるからであらうなどと言わざるをえなくなります。

恐らく誰もが、こういった作品のようななりゆきにならぬことを知っているに違いありません。現実はこの

のような絵空事ではなく、コネが幅をきかし、中傷とねたみがうごめいているに違いありません。青年をとりまく環境が、複雑で多量的な矛盾よりなることは勿論ですが、そればかりでなく、このような「夢」を読むと、一層深化して、自浄能力を失った社会を見るような気さえします。

李虹「小地点前後」(《人民文学》八三年八月)には、趙維民という会計士が出て来ます。彼は八一年の生産高が昨年より〇・六%増えたという報告書を作ったところですよ。これが最後の仕事になるかもしれない。というの、また機構簡素化をするという噂が伝わって来ているからですよ。彼は過去二度の簡素化の時、いつも真っ先にその対象となり下放させられました。そこへ、キノコはいらない？ 一斤十一元よ、という易課長の声がありました。彼女はタイプリストでしたが、文革の時、口先の達者なことでのし上り、その後も、政治上の中堅分子として課長におさまっています。今では、あちこちに関係があり、物資の流用をはかっています。そこへ畢課長がやって来て、彼女と口喧嘩を始めます。彼は元事務をやっていたが、政治宣伝の文書を作るのがうまく、のし上ったのでした。文革中からこの二人は仇敵の間柄です。二人の言い争いは、ドアを足で蹴とばし、片言の英語をしゃべる若者によつて中断しました。右手にバイクのヘルメットを持ち、どこからか手に入れた美人モデルの絵のあるカレンダーを皆に見せます。この若者には大きな後だてがあるようです。新任の鄭支配人によれば、下放を覚悟した趙維民はそこを出て行きます。早耳の易課長や畢課長によれば、機構簡素化をやる方の主任に彼がなるようです。

主人公の会計士は若者ではありませんが、以上のあらずじからだけでも、彼をとりまく環境の複雑さと深刻さがわかれると思います。文革で成り上った者たちは今でもそのままの地位を占め、普段は無能のようでも、

何かの物資や情報が必要とする時にその力を発揮するのです。それ故、彼らの地位は不動で、その職場になくはならないものとなっています。これは、物や情報の供給が少なく限定されているという基本的構造が変らないかぎり、彼らが張りめぐらした権力と情報の網は有効で、少々の政策変更などではビクともしないことを示しています。この作品も、知識分子重用の現実政策のもとにあつて、主人公の実務家が機構簡素化の主任に抜擢されるでしょうが、それは暗示されるだけです。むしろ、

趙大将、確かな消息によると、あなたにひとつ機構簡素化の仕事の長になつてもらふということですよ。この方面で何か必要な資料がありますか？この私が揃えてあげますよ！

と畢課長が耳打ちする描写に、文革幹部のしたたかさを感じ、そういう現実を直視している作者の目に、私は救いを感じます。

彭克柔「教訓」(人民文学)八三年八月)は、ある研究所の「私」が、朝の放送で、ある省の老幹部が自分の娘を香港の資本家の妾にしたので党籍を解かれたというニュースを聞きます。「私」は食堂でこの話を同僚の老劉や老李に話します。すると後にいた副書記が、そんな老幹部がいるとは信じないと断言します。放送で言ったのだと「私」は言いますが、副書記は、そんなニュースは聞かなかつたと言います。老劉、老李そして小陳、老何、芳芳も、自分は放送を聞いていないと早々に席を立って離れてしまいました。部屋に行くくと新聞が届いていて、第一面の下にこのニュースが載っていました。「私」は、党はこのような醜聞も掛け

にするのだと感激して、新聞を手に副書記の部屋へとび込みます。ご覧なさいと言う「私」に、副書記は、君は何をそんなに喜んでるのだ。ほかにもいっぱい良いニュースがあるではないか。アメリカの若者がレーガンを射ったというニュースの時には、君はこんなに積極的でなかった、などと言った上、君は七六年の天安門事件で政治デマをとばしたとかいうじゃないか、とまで言います。「私」はすっかり縮み上つてしまい、返答もろくにできません。副書記は、以前なつた労働者毛沢東思想宣伝隊副隊長にふさわしく、これは党に対する親近感の問題、態度の問題であると言います。そして、びくついている「私」の肩をニコヤカにたたき、これを教訓としようじゃないかと言うのでした。

文革中は、「古いことも新しいことも一緒にケリをつける」ということがおこなわれました。これはまだ記憶に新しいことです。個人の「古いこと新しいこと」、それが檔案（個人履歴の保存書類）というものです。この檔案を、党の書記は握っています。これが党書記の絶大な権力の源泉です。この作品の「私」が、醜聞も公けにする勇氣ある党に感激し、これこそ真の党だと大いに希望を抱くのと裏腹に、「私」と直接関係ある現場の党は、このように不透明で陰惨です。この作品は、ごく軽なお話ながら、現実支配の基盤の一つをとらえたものと言えるでしょう。これでは、社会に自浄作用を求めるのは、ましてその力を安易に青年に求めるのは、無理なような気がします。

六

西安から成都への普通列車に、一人の青年葛喜来が乗っています。父親がアイスキャンデーの棒の生産を請け負い、ためた金を彼の帰郷費として送ってきたので、三年ぶりに帰ります。彼は成績抜群、UFOの報

告などで教授も認める優秀な学生です。車中、同郷の女友達方円のことを思い浮べます。彼女は金持ちで美人の女学生です。去年の夏、一緒に兵馬備を見に行きました。その時彼女は、アイスクャンデーを残りがついたまま捨てた上、足で踏みにじりました。それを見た彼は、彼女の行為を父親への冒瀆と取りました。父は、この暑さの中せつせと仕事に励んでいるに違いありません。七十四歳の痩せて腰のまがった、しわだらけで眉毛まで白くなった父を思い、親がどんな気持ちで学費を送っているかわからない「学生貴族」の方円に、怒りをぶつけ別れて帰ってしまいます。彼女の方は、葛喜来が何故急に怒り出したのかわからず、きつとケチな彼がおごってくれたのに粗末にしたからだろうと思い、バルザックの小説に出てくるケチな男グランド（葛朗台）にちなんで、葛喜来を小葛と仇名します。彼のような小農経済、農民意識が、八〇年代の青年にふさわしいだろうかとも思います。葛喜来の方は、このこと以来、方円とは同世代だが、別々に巣を作る鳥のようなもので、一緒になれないと思うのでした。汽車が広元駅に着いた時、意外にも方円が乗って来ました。隣りに座った彼女は、前の車輦で、切符をなくした老人と車掌の口論を見たと言います。彼が見に行くと、その老人は彼の父でした。方円は初めて、このしわだらけの農民の顔を現実のものとするのでした。以上は、《飛天》▽八三年九月号に発表され、《小説選刊》▽八三年十一月号に転載された、王戈の「樹上の鳥」という作品のあらすじです。

この作品は、実はそれほど技巧的にも内容的にも、新鮮味のある優れた作品とは思いません。主人公と女友達が単純で図式的な対比をなされ、二厘のアイスクャンデーの棒への拘泥や、切符を買ったかどうかと口論する老人が主人公の父であったりする、作偽的な作品です。論ずるに足りぬ作品と思えたのですが、やや詳しく紹介したのは、閻綱という、《小説選刊》誌の十月号から副編集長となった評論家が、わざわざ一文

を書いているからです（『樹上の鳥はつがいとなる』か？——『樹上の鳥』を読んで）△小説選刊▽八三年十一月）。

閻綱は言います。

この小説は、始めから終りまで労働人民の醇朴な感情にあふれていて、とても真摯で自然である。読者がもし農民の子弟であり、農村出身の知識青年なら、きつとこの小説を喜ぶに違いないと思う。だが、この小説を喜ぶのは、何も農民の子弟に限りはしない！

そして、二厘のアイスキャンデーの棒をめぐる描写は強く胸を打つと述べたあとに、

年老いた父親の形象は感動的である。息子の記憶によれば、父は痩せ衰え、腰はまがり、額には深いしわが刻まれ、まばらなひげに白くなつた眉も、これは四川絵画展覧会で入賞した『父親』と題するあの肖像画そっくりである。父親の顔中のふぞろいの横向きに刻まれたしわは、深々と鋤かれた溝のようである。それは土地そのものである。顔色は黒々としている。ここには、真昼の照りつけと朝夕の風や霜が記録されている。（中略）その通り、これこそ葛喜来の父であり、また、中華民族の子弟共通の、深刻な苦難をなめてきた父親なのである。このような父親を愛することは、祖国に対する愛、民族に対する真摯な愛にほかならない！

と述べます。この作品の父は、四川絵画展で入賞した羅中立が描いた「父親」像と同じで、中国大地の形象であると言います。そして、父親は中国大地そのものであり、そこには伝統がある。社会主義の精神文明をうちたてるためには、祖国の伝統を忘れてはならないと述べます。

瑣細ささいな一本の棒が、男女の情と父子の情に影響を及ぼした。瑣細な一本の棒が、二つの世代の思想感情と、二つの時代の伝統関係を疏通し、狭隘な「世代の断絶」という觀念を打ちこわし、労働人民が後世に伝達しようとする美德をつないだのである。これは国の粹だが、「国粹」派ではない。社会主義の精神文明をうちたてるには、民族の優秀な伝統を断ち切ることはできない。

閻綱は、最後にこの作品の感動が何によるかを述べ、その愛情は具体的で人道的だと述べます。

更に重要なことは、王戈同志の農民に対する愛、労働人民（青年の創造的で刻苦勉励する学習も含めて）に対する愛によることである。これは作者の衷心からの愛である。この愛は、例の少数の者がペラペラしゃべる人道主義、たぐいまれな宝物と珍重する人道主義、一般化して中身のガランドウな人道主義と比べて、ずっと具体的であり、ずっと人道的である。

王戈の「樹上の鳥」は、精神汚染の一つである抽象的な人道主義ではなく、具体的な人道主義すなわち祖国の労働人民への愛のある作品であると、閻綱は言うのです。この図式的な作品が、これほどまでに称讃さ

れねばならないのは異常なことに思えます。言うまでもなく、八三年十月の十二期二中全会以後の、文芸界における精神汚染除去のキャンペーンがあつて、社会主義の精神文明をうちたてるにふさわしい、わかりやすくして前向きな作品が求められているからでありましょう。閻綱の文の日付は、二中全会が始まった、八三年十月十一日です。

七

「ふるさとの、ひとすじの黒煙」(《人民文学》八三年十一月)で、鄧剛は、町の工場の職場主任が、農村の従兄(いとこ)の変様に翻弄される話を語ります。

町の王利宝は、農村が本当に変わったのだろうか、山奥の従兄(いとこ)のことを思います。そこへ従兄が差し向けたトラックが迎えに来ました。春節に農村へ行くのです。従兄は、新築の家で、人民公社の幹部とともに彼を歓迎します。かつて彼の家へ来た時のビクビクした態度はありません。従兄(いとこ)は、公社の工場を経営し、農作による収入とは比較にならない額の現金収入を村にもたらしていました。春節というのに、村は総出で働いており、妙な熱気があります。町の工場が春節で休むその仕事を、従兄が請け負って来たのです。従兄の妻子も工場の若者も、このひと働きが×元になるぞと叱咤激励する従兄の声のもとに働いています。王利宝は、公社の工場が無秩序なこと、保安上危険がいっぱいなこと、それでいて作業上合理的に工夫されていることなどにびっくりします。彼は早々に、春節から黒煙を上げ、誰も彼も忙しく働くふるさとを引き上げます。彼を送り返すトラックには、王利宝の工場の首脳陣へ贈るリングやピーナッツが満載されています。もともと彼の工場とコネをつけるために、従兄は王利宝を招いたのでした。

この作品には、確かに、農民の「新人新氣風」があると云えましょう。しかし、農村の無秩序な熱氣や農民のしたたかさなどが窺われるにせよ、果して「新人新氣風」というようなプラス評価のできるものでしょうか。農作による小銭よりも、まとまった収入の下請け仕事に魅力を感じずる農民は、農民でなくなった農民或いは都市に隸属することが一層強化された農民でしょう。現代化の鬼子である拝金主義が、ものすごい勢いで、辺鄙な山村をも破壊している状況が見えるような気がします。ここまで来た以上、もう引き返せないといった迫力が、従兄にはありますが、彼の工場の吐き出す黒い煙が、ふるさとの青山を汚染していることも確実です。鄧剛という、作家協会が支援している作家の目が、どちらに向くか興味あるところです。

私は、先に陳吉蓉の「ある靴直し店の話」を、現在の文学界を比喻したものととして読みました。しかし、そのような読み方は、たぶん文学としての読み方ではなく、邪道な読み方なのでしょう。ただ、このような邪道な読み方ならば、陳吉蓉の作品はまだおもしろいものでした。どう読んでも、おもしろくもおかしくもない作文と評さざるをえないような作品が多くなっているような気がします。

李功達「日曜日の選択」（《人民文学》八三年十月）は、日曜を実家で過ごせない、地方出の男子学生が、同室の友人で、女友達を次々に変える町の色男の学生に、君の態度は女性の心を傷つけるものだと意見しようと決意する作品です。

これは、男女交際が不正常的なもので、正しいあり方を示そうとした作品なのかもしれません。しかし、もし不正常的な現状があるとして、現実の不正常的な男子学生なり女子学生は、このようなチャチな作品を読むのでしょうか。これは、わかり切ったことに、私は思います。ただ、こんなわかり切ったことを百も承知で、今な

お堂々と文芸作品として通そうとしているのであろう、その肺活量の大きさには圧倒されます。

張潔は、《上海文学》八三年九月号の、「葱を少し、ニンニクを少しに、ゴマ塩を少し」という作品で、猫と犬を描きました。

主人から「不知足（足るを知らぬ奴）」とされているミーミーという猫は、主人のお題目である、ロングブリゴロンという京劇の一句をいつも聞かされ、時には蹴とばされ、時には、突つかれながら、「まあいい、私はやっぱりおとなしくしていよう。ひとさまのものが素晴らしいなどと思わずに」と言います。また、四則計算が出来ることで人気のある、サーカス犬ノビがいます。なぜ四則計算ができるか、学者や評論家がノビについて、論文を書いたり生理実験をします。中にはそれで金をもうける者もいます。費費という訓練師も、ノビについて観客に説明したりします。そして、雑種の犬にすぎないとされたノビに、観客は興味を失い、ノビの方も悪夢にうなされ、食欲がなくなり、痩せ衰えます。ノビは、ある日の夕方、遠くから自分を呼んでいるような声を聞き、海に入って行きます。費費は「お前を愛しているよ」と言います。ノビも「私もあなたを愛しています」と言いつつ、波に身をまかせます。

メタファーとして提示されたこの作品から、その主人、訓練師とペット、サーカス犬の関係を通じて、ある種の構図を、また、そのペットやサーカス犬の漏らすことばを通じて、ある主張や不満などを読みとることは可能です。

張潔は、八三年五月に書いた「言は意を尽くさず——七枚の寄せ木玩具」を書いて」という文で、麻葉吸引のことにふれ、それが単純な観点で割り切ることのできない問題であることをアメリカへ行って初めて初

めて知ったと言います。そして、日光をプリズムを通せば七つの可視光線になる「光の拡散」の科学定理を中学で学んだと述べたあと、最後に次のように言います。

科学の任務は、事物の発展法則を明らかにし、客観的真理を探求し、世界改造の指南となることである——「辞海」にはこう書かれている。

指南、それもいいであろう。

私はただこう言いたい。われわれがある事やある物、或いはある人に最後の審判を下す時に、プリズムを忘れなければ結構だ、と。

この文は、張潔の「葱を少し、ニンニクを少しに、ゴマ塩を少し」という作品の解説になるかもしれない。私は、作者がこの作品で描いたのは、ある断念なのだと言つて、この文章を終わりにしたいと思えます。

(一九八四・一・二一)

三 第六回優秀短編小説コンクール

——『善意』の人物描写に傾く——

一

中国に留学中のある女子学生が、旅行先から私に手紙をくれた。無断で私信を公表するのは恥ずべきことですが、現在の中国の情況を見事に活写していると思われるので、引用します。

「……私の周りのおじさんたちは、みな日に焼けてまつ黒で、さつきからお昼ごはんには、焼餅と生の大根をさかんにかじっています。タバコの葉を自分で紙にまいてモクモクさせている人もたくさんいます。西寧郊外の華中県塔爾寺と、できれば青海湖へ行くのが目的なのですが、どうなるでしょうか。（中略）自分を中国人民と自覚しているか、どうもあやしい人の中にいると、かえってホッとしています。

S大の幹部候補生の、『今は日本のほうが繁栄しているが、しょせん日本は中国の一部』という傲慢な態度に接していると、『満足な水道設備もつくれないくせに』と思ってしまうのですが、こんな汽車の中に

いると、カメラでバチバチやっている自分に疑問を感じてしまいます。やたら氾濫する河や、石ころだらけの土地を相手にしていれば、中国人が限度を知らなくなるのもわかる気がしますが、文化の爛熟時代の日本で成長した私は、超エリート意識とからんで、理想に向って敢然と立ちむかう式の、中国の大學生は苦手です。共産主義青年団員だつたりすると、完全にお手あげで、ほとんど、とりつくしまありません。いっしょに話をするという余裕が感じられません……」

現在の中国の状況は、生活次元では、自分が「中国人民」であるかどうかなどにかかわらず、よりよい食事、よりよい座席を求めて活動する、多くの農民、老百姓（一般大衆）^{ラオバイン}がおり、一方にはごく少数の、その生活に一定のわくをはめる幹部が、ひたすら富国強国をめざしているという構図です。

これは、何もこと新しいことではありませんが、広い意味での幹部が、これまでと違って、たとえば日本に対して、随分露骨に対応するなど、ここ二、三年の「新しさ」でありましょう。

「日本なんて」という感情を表面に出してはばからぬようになったのは、八一年十一月の、女子バレーボール・ワールド・カップ杯で、中国チームが日本を敗つて優勝してからのことです。日本がかつて、水泳の古橋、橋爪に、ボクシングの白井に、自信をとりもどすようになったのと同じく、中国における女子バレーチームの優勝は、文革以来鬱屈していた感情を噴出するきっかけになりました。中華の振興です。

当時、私の知っている中国の学生たちは、テレビ室に集まり観戦し、勝利が決まると、既に電報局に配置され、この時を待ちうけていた代表の学生が、大阪にいる中国チームへ祝電を打つたのです。彼らは、すすんで募金を集め、何十元もする七宝をお祝い品のとして、手紙を添えてチーム宛に贈りました。彼らは、

祝賀会を開き、酒を飲み、唱い、まだおさまらぬ興奮を鎮めるべく、校内をデモしました。市内の大学生は、町なかへデモをし、天安門までくり出した者もいました。喜びを率直に表わしたのは、多くが若者で、なかには直接外国人に奇声をあげせ、乱暴をするという事態まで引き起こし、天安門へのデモを中止する通知が出たり、中国人としての体面を重んずるよう呼びかけた論評が新聞に載ったりしました。日本人に対して、随分横柄な態度になったのも、この頃からで、子供が「小日本」と罵られたりするのも顕著になりました。

しかし、女子バレーの活躍は一つの事件であり、きっかけにすぎませんでした。それ以後の、スポーツのみならず各分野での、世界の検舞台での活躍は、百の宣伝文よりも効果的に、若者たちに自信をうえつけたに違いありません。

さすがに小説の方では、理想に向って敢然と立ちむかう式の中国の大学生は、あまり出てきません。八二年『解放軍文芸』九月号に載った、主人公の青年が、視察団の一員として日本にやって来て、年長の団員が日本の資本家の言いなりになるのとは違って、自国の権益を主張し交渉を対等にしたうえ、資本家の不正を摘発して、国家的損失を救うといった、羅来勇の「世界はかれらの前にひろがる」という短編が、愛国的感情を鼓舞する作品の代表でした。

文学は愛国的であれとする論調は、既に七九年の李剣「歌徳」と「欠徳」で、社会主義をうたいあげ、工農兵の徳をたたえよ、四人組の犯罪的行為摘発や社会主義の悪弊を暴露した作品は徳を欠くとする論が出て以来、陰に陽に表われていたものです。ただ、李剣などという文芸関係の者が文芸について論じたものよりも、為政者が文芸について、こうこうすべきだと論じたものは、議論の余地なく方策として遂行されるという意味で注目に値します。八一年四月の『解放軍報』による、白樺の映画シナリオ「苦恋」批判も、『鄧小

平文選」が出版された現在では、同年七月十七日に語ったという鄧小平の「批判の方法がよくないからといって、批判が誤りであるとはいえない」や「『解放軍報』は、もうこれ以上批判しなくてよい。『文芸報』が質の高いすぐれた文章を書き、『苦恋』批判をおこなえ」といったことばを無視するわけにはいきません。文学者の自己規制といえる、八二年六月の「文芸工作者の公約」の決議も、きつと、同年四月、中央宣伝部への講話の、胡耀邦のことば「ブルジョア階級の毒素をまきちらすやからに對しては、最終的には法律に訴えよ」（八三年一月『紅旗』に公表）に對する反應であつたのでしよう。八三年六月の、第六期全人代第一回会議で、趙紫陽が「政府活動報告」中、文芸の自由化、商品化の傾向と、社会効果に責任を負わぬ現象に警告を与えたことから、主として劇団などで整頓がなされました。そして、昨年十月の二中全会以後、文芸界の整風が起るわけですが、これとても、二中全会で話したという鄧小平の講話が公表されたなら、いろいろなことがわかるのかもしれませんが。

ここでは、先に引用した手紙に言う、「ほとんどとりつくしまありません。いっしょに話をするという余裕が感じられません」に表わされている、中国人の自信、というより独善性に注意しておきましょう。

二

短編小説が、中編小説などにくらべて、おもしろくないと言われてから、かなり久しいものになります。そして、このおそろしく漠然とした「おもしろくない」といった印象は、正鶴を射ているようで、昨年には、『人民文学』編集長となった王蒙が、よき短編の出現を呼びかけ、特集を組んだり、自らも書いたりしました。

私は、そういう傾向を認めた上で、毎年おこなわれる全国優秀短編小説コンクールの発表を楽しみにしています。というのも、やはり、このコンクールに入選する作品は、その年度の作品のうち、文章が良く、題材のおもしろい作品が、多く選ばれるからです。八二年度の、蔣子龍の「年始まわり」や梁曉声の「ここは神奇な土地なり」など、また、金河の「未練のみではなく」や鉄凝の「ああ、香雪」など、独特な風格をもった感銘深い作品でした。

今年三月に発表された、八三年度の作品はどうでしょうか。

「短編小説の創作は、近頃低調で、八三年には特にすぐれた、強烈な反響を呼んだ作品がないと言う者もおりますが、あなたはどうかお考えですか？」という、「文芸報」の記者の質問に、中国作家協会副主席の馮牧は、

「私はそうは思いません。かつての『喬工場長の赴任』（蔣子龍作、七九年）や『西線軼事』（徐懷中作、八〇年）のような作品はないかもしれないが、全体の水準は上っており、思想の深さ、芸術の質ともに、八二年をこえています」

と答えています。

今年、第六回めのコンクールは、選考の仕方が変わりました。

今回は、読者の直接選挙はなく、推薦があるだけです。『小説選刊』誌編集部が、初選（第一次選考）小組を作り、初選通過作品を選びます。この小組には、十五の各地の文学期刊の編集部の者が加わって、南と北

二つのグループに分かれ、各地の作家協会分会や文学期刊編集部が推薦した四百篇近くの作品と、読者の手紙による推薦の作品（これは、二千通近くの手紙で、八千近くの作品の推薦があったそうです。その全部をグループの者が読む対象としたのかどうかわかりませんが）を、どの作品も少くとも二回ずつ読み、意見を添え、グループや全体の討論をへて、四十篇近くの作品を選び出しました。その第一次選考通過作品を、十七名の選考委員（馮牧や王蒙や蔣子龍など）が、春節の後の十数日間で集中して読み、無記名投票をして入選作品を決定しました。過半数の得票をした作品が、ちょうど二十篇であった時、思わず強烈な拍手がわきおこったということです。

選ばれた二十篇の作品につき、舞台となった場所や主人公、それにごく簡単な内容を「表」にしておきましたので参照して下さい。

馮牧は、この八三年入賞作のうちでも推薦する作品として、「塀」「陣痛」「わが遙かなる清平湾」「強奪がおころうとした……」「兵車行」「あの山、あの人、あの犬」「条件はまだ熟さない」などを挙げます。

私も馮牧が特に名を挙げた七篇は、仲々すぐれた作品だと思います。

陸文夫の「塀」は、ある町の建設局の塀がこわれたので再建するに当り、どのような塀にするかにつき議論が延々と続きます。中国式のにせよという古典派と、新しい洋風のにせよという現代派、そしてその他という三派に分かれ、実施に移せません。若いながら拔擢された馬而立マユリツリが、初仕事として、塀を何とか建てるようまかされます。彼は、常日頃から培ってきた「関係」をつかって、短期間に、折衷式の塀を作り上げます。出来上ってみると、各派から文句が出た上、独断でこのような醜いものを作ったと責任問題にまで話が及んできました。ところが、ちょうど開かれた建築学会の学者たちが、この塀をほめたので、今度は逆に、

自分たちが前々からこのような塀を作るよう主張していたと各派は言いだすのです。

一九八三年度全国優秀短編小説入賞作品一覽

作品名	作者	主人公	場所	内容
1 「塀」	陸文夫	青年、実務家	地方都市	建設局の塀を再建するに当っての、旧派、新派、その他三派の論争と実務家青年の働き
2 「わが遙かなる清平湾」	史鉄生	10年前、文革中に下放した男	陝西北部の農村	牛飼いを教わった貧農の思い出
3 「強奪がおころうとした……」	楚良	農業技術員から公社副書記に抜擢された青年	農村	化学肥料を強奪しようとする農民に、百袋の特別販売を独断でやって、暴動を回避した話
4 「陣痛」	鄧剛	文革中、造反派であった労働者	工場	口先きばかりで、腕に技術のなかった文革青年の再生
5 「秋雪湖の恋」	石言	若い解放軍の班長	農村	兄が反革命分子とされた娘をかくまい、事実を究明する若い兵士たちの活躍
6 「兵車行」	唐棟	若い解放軍の兵士	辺境、喀喇崑崙山	粗暴だが、心の優しい辺境守備の兵士と衛生員との悲恋
7 「琥珀色の篝火」	ウロルト (エヴェンキ族)	中年の獵師	東北の森林	病いの重い妻を置いて、道に迷った三人の漢族の男を救出しに行くエヴェンキ族の獵師
8 「あの山、あの人、あの犬」	彭見明	年老いた郵便配達夫	山村	最後の勤務に息子と山に入り、仕事の要領やコツを教えつつ息子に信頼を寄せる老人とその相棒の犬
9 「親戚どうし」	林元春 (朝鮮族)	没落しかけた名家の新婚婦	朝鮮族の大家	地位や財力によって冷遇される親戚づきあいの中で、交らず援助してくれた兄嫁の話
10 「バス道路が家の前を」	石定	老人	山村	バス道路際に越してきた老人が、将来の繁栄のため、嫌いな男が隣りに店を出すのを許す話

第6回優秀短編小説コンクール

11	「条件はまだ熟さない」	張 潔	党支部書記	都会	次期副局長になるため、かつての同級生で今は研究者の昇進を、妨げようとする党書記
12	「樹上の鳥」	王 戈	農村出の貧しい大学生	地方都市	父親の仕送りで勉強する大学生が、遊び好きで浪費ぐせの女子大生と仲違いしそうになる話
13	「泥かまど遺風」	李 杭 育	かまどに画をかく絵師の老人	地方都市	自分の家を自分の画で飾るのが夢であったのに、息子夫婦に新しいビル形式の家にされてしまった老画家
14	「シャルブラック」	張 賢 亮	文革期に下放したトラック運転手	辺境、新疆	自分の二度の結婚を、新疆を舞台に同乗の記者に語る
15	「雪国の熱鬧鎮」	劉 兆 林	国境守備の新兵と班長	辺境、東北	乳飲み児を生んだ女のために、国境を越えてミルクを調達に行った、直情径行の新兵の話
16	「逍遙の楽しみ」	陶 正	猟師	陝西北部	騙しとられた狐を、市を歩きまわって、とりかえす話
17	「除夜」	達 理	待業青年	地方都市	除夜にひともうけしようとした青年が、客が四人しか来ず大損するが、好意をうける話
18	「回転する世界」	陳 継 光	汽車の運転手と息子のパイロット	汽車と飛行機	汽車の父と娘、飛行機の息子と母が、それぞれ仕事をしつつ、蘇州の先で交差する、技巧的な話
19	「四人の四十歳の女」	胡 辛	四人の同級生だった中年の女性	地方都市	卒業後、偶然出会った四人の同級生が、これまでの身の上を話し合う
20	「船にて青浪灘を過ぐ」	劉 艦 平	下放後都会へもどれない女	川下りの急流難所	急流で娘を犠牲にしてしまった水先案内人の苦境と、その事により村に残ることを決意する主人公

この小説は、まず、陸文夫の文のうまさで読ませる作品です。そして、読者をその語りによって、ユーモラスなお話に引き込みます。主人公としての馬而立を、ひとりの報われることのない実務家として形象することに、それほど力点があるわけではありません。むしろ、会議が開かれ、賛成、反対、その他に分かれる、そういう現実の事象。また、事がなされると、ただ口だけを出す者、その成果を横取りしようとする者など、そういう現実の不可避な事象。そういったものを、作者はほろ苦く語り聞かせるといっていいでしょう。

鄧剛の「陣痛」は、この二十篇の中で唯一、工場を舞台とする作品です。文革中、宣伝の仕事により先進生産者として五級リベット工にまでになった郭大柱は、工場が請け負いの制を始めると、技術を持たぬ無能な男として、同僚から受け入れられなくなりました。かつて表彰されたり先進だった者が、今、落後者になるという現実をどう受けとめるか、かなり厳しい問題を正面に据えています。鄧剛は、一つのあり方として、郭大柱を他の労働者に沸かした湯を配る、日本の所謂「お茶くみ」とします。一からの出直しです。

史鉄生の「わが遙かなる清平湾」は、十年ほど前、陝北の農村に行き、その生産隊で二年間牛飼いをした思い出を綴る、この六月に第一回「青年文学創作賞」も得た作品です。作者は、この体験から本当に下肢をまひしてしまうのですが、作品では、黒い老牛が若い赤牛にそのボスの位置を奪われることや、牛飼いの老人の隣りの寡婦への恋心など、貧しくとも純朴な清平湾という村の人々の情が、記憶のペールによって詩情を漂わせ現出します。

楚良の「強奪がおころうとした……」は、公社のおもだった者には手に入って、一般の農民にはまわって来ない化学肥料を、農民たちがやむなく倉庫を襲って奪おうとします。その情報をトイレに入っていて立ち聞きした余維漢が、公社の幹部に抜擢されたばかりで、権力も信望もないなかで、身を挺して防ぎ止める話

です。これも、人物形象よりも、リアルなディテールをふまえて生々しい現実の動きを再現しようとする作品です。

張潔の「条件はまだ熟さない」は、次期副局長のポストをねらって、策を弄したにもかかわらず、第三梯団の知識分子を優遇するという党中央の政策によって、実務上無能と思われた研究者にそのポストを奪われる話です。党中央と現場の実権派とのズレが描き出されます。

張潔は、受賞後の感想として、私の作品は、思想上の深さ、芸術上の風格どちらも「条件はまだ熟さない」段階だと述べます。それにもかかわらず、この小説は大きな反響を呼んだと言います。「条件はまだ熟さない」という短編は、『北京文学』誌の八三年文学賞もかちえたのですが、その『北京文学』編集部の壁に、「民意測定表」なるものがあって、『北京文学』に載った小説についての読者の評定数が記されているようです。反響が大きかったのは何故か？ 当面の社会生活かなり重要で、読者の共鳴を引き起こす問題を、すばやく反映したからではないか、と張潔は自ら述べています。確かに彼女は、党支部書記の不正という、かなりきわどい問題を扱っているのです。彼女が、この小説の創作に、いままでのどの作品よりも一番苦労したというのも、わかる気がします。

それにしても、この作品が現場の実力者の不正という鋭い社会事象を扱いながら、彼女のこれまでの作品「愛、忘れえぬもの」や「重い翼」などのような、現実感と生活感に今ひとつ欠けるのは、党中央の政策がアプリアリに善なるものとしてあるからかもしれない。党中央が打ち出した、第一の老革命世代、第二の現指導層の革命世代、それに続く第三梯団として、四つの現代化を体現すべく、知識分子を育成しなければならぬという政策は、正しいのかどうかと問われれば、正しいに違いないでしょう。その正しさが、現実

という猥雑な事象の中で、なくてはならないものであるにしても、作品が党中央の正しい政策で社会事象の矛盾を解決した時、味気なくなるのは、やむをえない事実です。ですから、張潔も、先の感想の中でこんなことを言っています。

「ある友人などは、はばからずこう言った。『こういった題材をこんな風に書いて、なお人に読み続けさせていくのは、容易なことじゃない』と。当時私は、首を吊るべきかどうかとさえ考えた」

しかし、張潔は首を吊らずに書き上げたのでした。党支部書記も、出世欲や嫉妬心をもった一介の親父にすぎないことを暴露しています。その男が権力を握っていますから余計俗っぽい世界が現出します。現実矛盾の最も集中的に表われるところが党支部書記で、その形象は、文革前及び文革中の、あの苦行僧のような、聖者のような滅私奉公型の書記の形象とは全く違います。これは、共産党が支配する中国において、嚴重なゆゆしき問題です。没理想的な、精神的高尚を感じることでできない幹部が、澱のように沈澱している現実が、ここに暴かれているわけです。

しかし、考えてみれば、この作品で「正しき」を正しきとして保証しているのは、何なのでしよう。かつて趙樹理は、党（中央）と現場の幹部（工作員）の構図に、人民大衆を基盤として描き、その人民大衆が党の正しさを保証し、教条主義や官僚主義の幹部を批判する作品を書きましたが、この張潔の作品では、党中央と現場の幹部という構図はあっても、「人民大衆」の概念は既にあります。ここに、八〇年代の作家たちの、そして張潔が自ら言う「首を吊るべきかどうか」という苦悩があるのだと思います。

一言つけ加えるなら、私はけっして、張潔に「人民」を描けなどと、安易に言っているわけではありませぬ。彼女がかつて、病人と思っていた同室の患者が意外にも優秀な医者であつたという、現実の複雑さを虚構化した中編小説『七枚の寄せ木玩具』を書いたことがあります。私は、そういうメタフィジックな方法がもっと生かされていいのではないかと思います。たとえば、次のような描写です。

また襲ってきた。この寒気は三十秒に一度来る。その三十秒の間歇は、劇痛が避けられないことを確認する、恐怖の待ち時間なのだ。

「ありがとう、どうか触らないで」

イシメ 尹眉は煩わしかった。

「こうしたら少し良くなる筈ですよ」

例の向かいのベッドの患者は、深く信じて疑わぬ風に言った。自分の見解を固執し、断じて譲らぬという風に、尹眉の額を、一回また一回と揉むのだ。

「結構です。やめて下さい——」

「必要なことです。あなたには必要なのです」

尹眉は、まったく癩癩玉が破裂しそうだった。自分に必要なのは安静なのだ。彼女には、向かいのベッドの患者が何故その親切を彼女に強制しなければならぬのかわからなかった。この強制的な親切は、いったい、尹眉の苦痛を軽減するためなのだろうか、それとも自分自身のある信条のためなのだろうか？

「やめて——」

尹眉は、殆ど哀願するばかりに大声で叫んだ。

「あなたには必要なことです。絶対に必要です」

平板な声の調子の中にある、死んでも手を離さぬといわんばかりの頑固さは、尹眉の不快などによって影響を受けることは少しもなかった。

ここには、善意の強制に捕捉され、脱出しえぬ情況が見事に描き出されていると言えましょう。

三

八三年の全国優秀短編小説受賞作品に共通するテーマの一つは、「善意」ということだと私は思います。

家族に「反革命分子」を出した娘を、部隊内にかくまうという、石言の「秋雪湖の窓」も、その六人の班員の善意に加えて、二、三の村人の善意と、上級の中隊長の黙認という善意に支えられた作品です。

自分の病いの重いことを知りながら、夫に、道に迷った人を救出に行くよう勧める妻、そして、妻の重病を知らながらも救出に行き、さらに、すぐさま引き返したいのを我慢して、彼ら漢族の男たちの信頼と尊敬のまなざしのために、焚火をし食物を猟してきてやるエヴェンキ族コロンの善意(ウロルト「琥珀色の篝火」)。除夜の客をあてこんで終夜営業したのに、客が四人しか来ず、大損した待業青年の崔明も、その客の善意と、師匠の善意や師匠の娘の愛情が贈りものとなるという、達理の「除夜」などがあります。

彭見明の「あの山、あの人、あの犬」も、まさに善意の世界です。

主人公の老人は、郵便配達のも、きょうが最後の仕事なので、息子と永年の相棒である犬と一緒に山に登り、

アレコレ注意を与えます。

業務について話した後、父は息子に特に言いふくめた。

「もしモクセイ小屋の葛榮栄イロロンに手紙があつたらだナ、そしたら骨惜しみせず、三里ばかり足をのぼして届けてやらにやならねエ。奴は大隊の秘書と仲が悪いから、秘書が、まわしてやらねエんだ」

「どれが、モクセイ小屋だい？」

「ほれ、見てみろ」

父は、山の麓の平地やうねや家の間を、あちこち手でさし示した。

「木公坂キコウザカの王五オウゴは、目が不自由だ。奴にはよそで仕事している息子がいる。もし金を送ってきたら、お前が代わつて受けとつてやつて、王五に手渡してやらにやならねエ。手伝いが家にいるが、そいつは悪い奴で、前に一度金をだまされた。しっかり覚えておけよ」

「覚えとく」

「タニシ湾では、ここ二年ばかり兎を飼っている。郵便を届ける時にヤ、犬をしっかりとおさえておいて、かみつかせちやならねエ。犬はまだ慣れてねエから……」

まだまだであつた。

父は、こうして次から次へと、永年培ってきた仕事のコツ、秘伝を息子に伝授します。息子も黙々とそれを受けとめます。ここには、善意の美しい伝達が描かれています。父の善意は、まさに働く者の、自己の労

働への自信と使命感からきた善意だと言えるでしょう。どんな仕事にも、このように沢山の「気くばり」が必要なわけです。

ただ、日本の所謂「職人かたぎ」と称せられるものがそうであるように、往々にして、この善意には、本人の思い込み、独善の度が強くなりがちです。あるいは、他者との交感といった、開かれた自我、社会人としての存在感が少ないような気がします。息子に伝授するのが秘伝だ、という理由です。

その年の正月、彼は息子を背に乗せて、まる一日中遊ばせた。息子が下りたいと言っても許さなかった。彼としては、父親としての不足分を補いたかったのだ。

楽しかるべき、馬乗りの遊びが、下りたくても下りられぬ苦役となるのは、父親の善意が、相手の子供の意向を無視したものであり、別の意図があるからでしょう。善意は往々にして、普通の父親が父親らしく子供に接してやれないが故に、その不足分を補うべき代替の行為として発動するように、他者との平等な交感でないことがかなり多いのではないでしょうか。

支局長は老人をじっと見つめて、「あんた隠退しなさい」と言った。

老人は焦った。「わしはまだできるデ……」

「バカ言いなさんな。あんたには病気がある。組織ではもう決定したんだ」

老人に会って話をする前に、支局長は、ひそかに彼の息子を呼び、身体検査をし、書類を書かせて、

半月あまりも学習訓練をさせていた。

父親が永年してきた仕事に、支局長が退職の宣言をする場面ですが、支局長を含めた組織の善意、至れり尽くせりの暖かい配慮には、感激せざるをえません。

しかし、年若い、退職することの事実を、何故、組織の上の者は、当人に直視させ、会話しなかったのでしょうか。そういう一つの事実に直面した、一人の人間の対応に、作者の目が据えられていないことは、たぶん、上の者はその地位上の責任として、このように配慮すべきであるとする社会通念が前提としてあるからでしょう。組織の上の者は、恰も父の子に対するが如き配慮をするものなのでしょう。

馮牧が、『文学報』の記者に挙げた七篇の作品のうち、最後に残った唐棟の「兵車行」という作品も善意に包まれた作品です。

辺境守備のがさつな男上官星ケンクワレンの、淡いぎこちない恋心を描いた作品ですが、彼上官星が事故で犠牲になった後、せめてもの餞けとして、相手の女性秦月チンユエを葬儀に呼んでやろうとする中隊全員の善意で、この話は成り立っています。

「秦月同志」、中隊長は、私と握手し、しばし沈黙の後、やっとこう言った。「自分たちが、あなたに今、はじめて真実をうちあけるのを許してほしい。上官星同志は……犠牲になった」

私はめまいがした。まるで無数の白い花が、目の前をグルグルまわっているようだった。誰かが私を

支えた。この時、私は、思いもかけぬ光景を見たのだった。庚2—〇〇—一二号の巡回トラックの幌が開けられ、戦士たちが車から白い布に覆われたタンカを抬ぎおろした。タンカに横たわる者こそ、上官星だった。

ああ、道中ずつと、なんと彼は私と同じ車に乗っていたのだ。どうりで運転手が、あんなにノロノロと車を走らせ、気をつかったわけだ…… (中略)

——指導部が、道中、私に秘密にするように決定したのだった。私が知ったら、精神的にも体力的にもまいってしまい、その上高山ということもあって、この検問所まで上って来れなくなるのではないかと心配してのことだった。

(私は、彼らの私に対する、この配慮に納得できない。私は、もし早くから知っていたなら、けつしてわが上官星を、道中一人ぼっちで車の後ろに横たわらせたままではいかなかったろう。私は彼のそばに寄りそい、道みち言葉にならぬ話をし続けたに違いなかったらう……)

指導部は、彼女の若さ故に脆く思われる精神と体力をおもんばかって、彼上官星と彼女秦月との悲恋の結末を処理しました。決して悪意からではなく、善意の処理です。そういう善意を知らずに、運転手に車を早く運転するよう、秦月は怒り、文句を言い続けたのでした。なるほど、秦月は若かったのです。

しかし、作者唐棟が括弧をつけて、彼女の気持ち、ちよつぱり述べたように、若さは真実を知ること、耐えられぬものであるかどうか、また、真実を知った時の対応が、指導部が予測する型に限定されるものかどうか、疑問です。

あらかじめのお膳立ての上に事がすすめられ、多少の不満が残るにせよ、その処置に感謝されるならば、それは、正しかったことになるでしょう。ただ、指導部のこの正しさは、何かオペラートで包まれているような感じが残ります。

善意の世界が、往々にして、人間の生まな声、むき出しの感情、叡知への洞察等々といった赤裸々な人間存在にオペラートをかけ、対人関係をなめらかにしようとして、自ら正しいと信じて疑わない時、とりつくしまもない独善の体現者となることも事実でしょう。

四

善意の世界は、それは大変美しいし、感動的でもあります。しかし、善とか悪といった次元でない世界も、重要な文学の世界です。文学のおもしろさの一つには、通常の円滑な社会生活のオペラートを剥いだところにもあるのではないか。人間の声の中には、善意の声もおもしろいが、そうでない声もあつていいのではないか。少なくともそういう声に耳を傾けようとした作者がいてもいいのではないかと思えます。

そういう作者、作品を探索しつつ、一方、善意の体現者が自らを正しいと信じて疑わない現実の動きが濃厚である時、文学者たちが、どのようにバラエティーに富んだ人間の声を聞き分け、表現するのか、見守っていきたいと思えます。

そういう意味で、これからが、一層興味深い時ではないかと思えます。

四 第七回優秀短編小説コンクール

——人生への吐息——

一

一九八四年度全国優秀短編小説、俗に短編小説コンクール（第七回）といわれる作品の入選発表が、八五年の三月十六日に、そしてその授賞式が四月二日に行われた。

この入選作品十八篇につき、ごく簡単な紹介を、後に「表」にして掲げるが、ここでは、そのうちの二、三の作品に的を絞って紹介し、主な特徴について述べてみよう。

四月二日の南京での授賞式は、第三回の全国優秀中編小説（二十篇）と全国優秀報告文学（二十七篇）そして短編小説十八篇の計六十五篇の作者と編集責任者を表彰するものであった。席上、中国作家協会副主席である王蒙^{ワンモン}が、次のように言った。

「今回賞を獲得した作品は、ほとんどが『四つの現代化』と改革や対外開放政策の進展を熱烈に謳歌している。また、われわれの時代が前進していく上でぶつかる種々の矛盾や衝突を明示してもいる。そして、新

一九八四年度全国優秀短編小説入賞作品一覧

作品名(原題)	作者	主人公	場所	内容
1 「干し草」(干草)	宋学武	都会で知識分子となつた新婚の男	東北の農村	都会育ちの新妻に、自分の貧しい農村の生活や少年時代の思い出を語る。
2 「小さな工場に大学生が来た」 (小廠来了個大学生)	陳冲	大都市の大学で企業管理学を学んだ大学生	地方の小都市の工場	工場長の前近代的な管理運営を批判した意見書が採用されず、現実の事故処理に失敗してクビになる大学卒業の若者。
3 「麦刈り人夫」(麦客)	邵振国	山奥の貧しい父と子	陝西の農村	甘肅省の山奥から陝西の農家の麦刈りに出稼ぎに来た父子が離ればなれになり、それぞれ家で恩情を受けてまた家に戻る。
4 「青々とした峡谷」 (藍幽幽的峡谷)	白雪林 (蒙古族)	まだ年若い子持ちの獵師	内蒙古の峡谷	隣に老獺な男が来たので、住みなれた峡谷を出ていくが、棒切れ一本で狼を倒して、出ていくのが怯懦からでないことを示す獵師。
5 「網で漁する者と竿で釣る者」 (打魚的和釣魚的)	金河	県の副知事に抜擢された中年の技術者	東北のダム	休日ダムに気晴しに来て、ダム管理者の要求と袖の下を受け入れなかつたため、釣をしていた友人を目の前で処分され、面目を失う新任の副知事。
6 「祖母の星」(奶奶的星星)	史鉄生	地主に嫁いだ祖母	北京	「地主」成分から自分を解放しようと努力したが、いつも大きな運動にのまれ、無念の思いのまま死ぬ祖母の話。
7 「六月の話題」(六月的話題)	鉄凝 (女)	仮名の莫雨という人物	地方都市S	文化局の不正を暴露した投書への原稿料が届いた。受け取り人「莫雨」とは誰か、60日間の文化局の受け付けのようす。

14 「生と死の間」(生死之間)	13 「ぼろアパート記事」 (危楼記事)	12 「狼の出没する谷」 (野狼出没的山谷)	11 「姉」(姐姐)	10 「渡し船」(同船過渡)	9 「最後の塹壕」 (最後の塹壕)	8 「おお、若駒よ」(哦、小公馬)
蘇叔陽	李国文	王鳳麟	張平	映泉	王中才	鄒志安
火葬場に働く若い男	大金を手にしたおとなしい青年労働者	ベイチという狼と猟師	農村に下放し、そこで結婚した姉	護送の警官 渡し守の父子と犯人	陸軍学校出の若い中隊長	人事部長になった29歳の若者
北京	大都市S市	東北の荒野	農村	山奥の渡し場	ベトナム国境前線	地方の県
火葬場に働くゆえ、仲々結婚できない。趣味の「詩」を通じて知り合った産婦人科医と結婚して、女の子が生まれる話を一人称で語る。	S市Y大街にあるぼろアパートの住人たちの話。気の弱い青年労働者が、地方から出て来た美人を救うことから、大金を偶然手にし、逮捕され、釈放され、店を作るまでを戯作風に語る。	猟犬だったベイチが狼の世界に入るが、狼の親玉ダリの村襲撃に際して、元の飼主の老猟師の命を救う。	父が「右派」とされたため、農村に下放し、請われて農家に嫁ぐ。その家で一人前の人間扱いされて感激し、父が名誉回復して、都会に戻るチャンスがあっても断わり、義弟六人に嫁をもたせる姉。	大津波が襲って渡し船が危険にさらされた時、犯人の手錠をはずしてやり、自分は、川に落ちた盲目の占い師と若者を救うため渦巻に巻き込まれ死ぬ警官。	一人の兵士が敵陣に入ったため、人情から砲火攻撃を遅らせ、その結果、自陣に多大な損害を与え、職を解かれる中隊長。	主人公が汚職事件を再調査すると、証人が前言をひるがえしたり、主人公を誹謗する投書が相ついで、昇進はさし止め、現職も保留となる。

第7回優秀短編小説コンクール

15 「ひとすじの清き水」 (一潭清水)	張煒	西瓜作りの老人と西瓜好きの少年	山東の河口	二人の仲の良い老人が、請負い制になると一人の老人が西瓜好きの少年を嫌うので、もう一人の老人と少年が別の土地へ行き、真水を求めて土を掘り始める。
16 「父」(父親)	梁曉声	困窮の中で生きてきた一徹の父親	ハルビンと北京	建築労働者として貧乏な中で、わたしを大学に入れた。35歳の中年作家となった私のもとへ父がやって来て、「党に不満を言うな」と言い残してハルビンに戻る。
17 「白い鳥」(白色鳥)	何立偉	少年	農村の川原	いつもと違って遊んで来いといわれる。川原の向う岸に泳ぎつくと二羽の白鳥がいた。しかし突然闘争会のドラが鳴ったので、白鳥は飛んで行ってしまふ。
18 「大浪」(驚濤)	陳世旭	四人の男女	江西の揚子江支流	洪水を前にして見せるライバルや相棒の不遜や利己主義に対抗してそれぞれ、人生が順調でない者が意地をみせること。

しい時代の改革者を形象することにつとめ、人びとの精神世界の、豊かで微妙な、新しい変化や情報や問題を探索することにつとめている」

このことばは、必ずしも短編小説の傾向だけについて言っているのではないが、所謂上からの要求がどんなものであったかを知らしめる。

実際には、報告文学を除いて、中編、短編ともに、「改革者」の形象は意外に少ない。むしろ、「精神世界の豊かで微妙な」点を描いた作品の方が多い。とりわけ短編小説コンクールに入賞した作品については、その概括できるようである。

例えば次のような描写がある。

小さい時から一つの習慣を身につけてしまっているなら、ひとは、それを変え難いものだ。

わたしは農村を離れて十年余りになるが、今だに発音が直らない。そればかりか、遼寧^{リヤオニン}北部の農村の、ある種の習慣を執拗に残している。

例えば、わたしは、グツグツ煮た料理を食べるのが好きだ。ナス、ジャガイモ、野菜の湯漬け、魚、肉など、グツグツ煮ることのできるものなら、なんでもグツグツ煮て食べる。魚だけについて言っても、揚げたもの、薫製にしたもの、甘酢にしたもの、とろ味にしたものなどあるが、どれも味がうすくても足りない。もし水からグツグツ煮、とろ火でコトコト煮、それに葱、生姜、ニンニク、さんしょう、八角などを放り込み、煮上がってからもう一度きざんだ香菜^{パセリ}を入れるなら、その味といたら、とてもたまらない。しかも、「豆腐は千回ころがし魚は一万回」と言うように、時間をかければかけるほど、ニクはやわらかになり、味もふくよかになる。

もう一つ例をあげれば、わたしは草の香りをかぐのが好きなのだ。わたしが公園で妻と愛について語る時など、妻の方はいつも花壇に愛着する。だがわたしは、芝生の上に横になって、心ゆくまで草の芳香をかいでいたい。わたしは頑固に思う。花の香りより草の香りの方がよい、と。花の香りなど、クリームやオーデコロンを連想させるし、しつこい。しかし草の香りは、仕事をして疲れ、シャツの襟を開

け広げてふり払う熱い汗を、あるいは、腹が減りのどが渴いた時一口かんだ、まだ青みのあるゆでたトウモロコシを、あるいはまた、両手ですくった清らかで冷たい泉の水を思い出させる。(略)

ともあれ、軟らかに厚く茂った草地に横になるたびに、わたしは言い知れぬ快感を感じる。この感じは、平地のひとが高い山を見、内陸のひとが海を見た時の、あの感じに劣らない。その時、わたしはいつも、大声をあげたい、歌を唱^{うた}いたいと思う。しかしそのつど、表現の仕様がなくて、ただ草を何本か引き抜いて口にくわえ、草の新鮮でやわらかな汁液を吸う。さとうきびのように。

それがもし、干し草なら、一層いい。

右に引用した一節は、短編小説コンクールの第一位にノミネートされた作品、宋学武スウンシユウエイの『干し草』の出だしである。この作品については、まず、文章の良さから触れねばならない。総じて、コンクールに入賞するほどの作品は、文章が良いものだ。特に、簡潔で歯切れがよくなっている。ただ、それを拙訳が十分に表現できないのが残念である。

この文章は、一見具体的なようで、そうではない。事柄伝達だけの文体ではない。語られているのは、個人の嗜好である。

個人の好み、好悪といった、きわめてプリミティブな感覚である。が、ひとは読む時、「わたし」の嗜好の伝達を受け入れる以上に、その個人的嗜好によって刺激される何かを、感ずるに違いない。「何か」とは、場合によっては、個人的嗜好というものが個々の生の特殊さによって育はぐまれるのだという感慨かもしれない。嗜好を決定づける個人の来歴、人生への考察が、この文にはあるからである。或いはまた、「わたし」が草の

香りを好きだとすることから、そういえば俺も、ラムネのあの泡立ちが好きだったとか、ミツマメの寒天のスルリとした感覚が忘れられない等々の、読者の回想を惹起するかもしれない。否、私は、「わたし」が魚をどう食べるか、草の芳香がどうかなどという事柄の正否よりも、それを契機に、読者が内奥にあった嗜好、そしてそれを裏付けた習慣、そして幼児体験、そして自己の生の「核」となったような、ある時期への回想に誘い込まれるのではないかと思う。そう刺激する文章ではないかと言いたい。「わたし」の個人的回想が、読者の自己史への回帰を誘発する。この文章の魅力は、このように、事柄を忠実にそのまま伝達しようとするものでないところにある。

『干し草』は、四つの現代化に邁進する「改革者」の話ではない。改革や対外開放政策の進展を謳歌する作品でもない。遼寧省北部の貧しい田舎の思い出を、新婚旅行中に、妻に語って聞かせる話にすぎない。何のために思い出を語り聞かせるのか。まず筋をたどろう。

妻は、「わたし」のこんな習慣は農民の癖だと言って嫌う。今、新婚旅行の途中で、都会育ちの妻を郷里に連れて行くところである。母は手紙で、奥さんに家が貧しいことをよく言い聞かせるよう言ってきた。村のあまりの貧しさに、一晚で逃げ去った嫁もいるのだ。汽車からバスに乗り換えると、土くさい臭いがして、妻の顔色は悪くなる。前もって郷里のことを話そうにも、田舎の事物は平凡で、何の楽しいこともない。唯一自慢できるものといえば、家の前に広がる草原があるくらいである。といっても大きなものではなく、ちよっとした草地で、「わたし」たちが草原と呼び慣わしていたにすぎないのだが。その草原は、今どうなったか。母の返事には「お前が帰ればすぐわかる」とあった。

少年の頃は、この草原が「わたし」のすべてであった。草原の主ぬしのような老人、彼が「吃音おじ」である。その娘の小草シヤオツツノ、そして「わたし」よりやや年上の隣りの大青哥ダイセイカ。三人の子供は吃音のおじから、草原の鳥獣草木のことを教わりながら、毎日一緒に遊ぶ。虫籠を上手に作れた大青哥は、「吃音おじ」に、小草の婿になれと言われて顔を赤らめる。だが小草は、おじが作った上等の虫籠を「わたし」にそっとくれたりする。生活のすべてが草原にあった。「吃音おじ」は村一番の腕達者で何でもできたが、鎌は何よりも得手であった。秋になれば、草原の草を刈り、干し草に火をつけ、トウモロコシを焼くこともあった。

わたしと、大青哥や小草と、同じ年頃の子供たちが、今度は自分の家へ走って行って、まだ青みのあるトウモロコシを取って来、木の枝に刺して草地に立てる。下に干し草を敷き火をつける。火は風の勢いで、ピチピチパチパチと音をたてて焼け、にが、よもぎのような味を発する。焼けたトウモロコシもその香りに染ってしまう。わたしたちも食べ、大人たちも食べる。誰でも来て食べていい。まるで草原で手に入れたものは、自分一人のものでないようだ。その味は、都会人がハイキングに行つて食べるパンやソーセージやビールの味に決して劣らない。

農家の者は苦しいが、だが、そこにもそれなりの楽しみがあるのだ。

こういう話は、妻を喜ばす。草原はまだあるの。大青哥や「吃音おじ」は今どこにいるの。

わたしは、妻にどう答えていいかわからない。というのも、草原は本当のところ、平凡なのだ。「吃音

おじ、大青哥、小草、どれも本物は平凡だ。

しかし、心がわたしを呼ぶ。

妻の質問を借りて、そこでこの平凡な草原と草原の平凡な人びとのことを続けて語ろう……

冬が来て、草が刈られ売られる。だが「わたし」が小草と遊ぶ時、ほのかに草の香りがする。彼女は、五色の布で丹精込めて作った花柄の袋を、懐から取り出す。なかにこなぎ草が入っているという。それは日にさらすと、特別な香りがいつまでもするのだ。娘たちは、その種や茎をすりつぶし、袋に縫い込み、身につけるのである。草原に育ったというのに、「わたし」はなぜ知らないのか。

「あんなみたいな男の子に、何がわかるもんか」

小草は言いながら、袋をまた懐に押し込んだ。黒いキラキラする瞳には、女の子特有の矜持があった。

「ぼくにおくれよ」わたしは言った。

小草は顔を赤くした。

「まアいやだ。女の子のお守りを欲しがると、なんて恥知らずなの」そうは言いながらも、やはり袋を取り出した。ただ、すぐにはくれず、惜しそうにしていた。

「だめなら、鉛筆二本と換えておくれよ」

小草の顔は、さっと蒼くなった。手にした袋をまた懐にねじ込むと、お下げをひと振りして、走って行ってしまった。

続いて数日間、わたしと遊ばなかったのである。

こういう話は、妻は喜ばない。だが、その後の草原は、自然災害によるという食うに食えぬ日々に襲われる。おじは草原を歩きまわり、炭酸ソーダを作る。それを鍋に入れ、麦わらやトウモロコシの皮、或いは榆の樹皮などを煮、搗き碎き、澱粉をとるのだ。村人は、この炭酸ソーダのおかげで何とか食いつなく。「わたし」も澱粉の団子を、おじから貰う。だが、体にむくみの出たおじは、ある暴風雨の夜、草原のはずれで死んだ。村人は、フトンがわりに敷いていた貴重な干し草を持ち寄り、風習どおりに「唼音おじ」を包んで葬る。小草は「わたし」の家に引きとられる。「わたし」は翌年、県城へ勉強のため出て行く。その後、小草は十五き離れた小学教師に嫁いだという。大青哥は仲々結婚しなかったが、一昨年やっと、村の若い衆と同様、山東からお嫁さんを連れて来た。結婚式で、彼は、五色の布で作った花柄のお守り袋を、お嫁さんの頭に載せてやった。数日後、大きな鎌を彼は研とぎ出した。それはあの「唼音おじ」の大鎌であった。

「わたし賭けてもいいわ。いまごろ草原には、きっと一面に新しい草が生えているわよ」妻はまた興奮してきた。だから、車がガタゴト激しく揺れ出しても少しも気にせず、顔には子供じみた無邪気さが輝いていた。

「そうかもしれないね」わたしは、それほど肯定的でなく言った。
 というのも、あの何度も転変を経た草原が、わたしの満腔の熱望と神聖な記憶を、本当に抹消してしまおうのではないかと心配していたから。ただ、家からの手紙の——「お前が帰ればすぐわかる」にまか

せよう。わたしは思う。きっとそうであるに違いない。きっと妻が見たがっている、そういう状態であるに違いない、と。

妻は、わたしの口ぶりなどまるで気にせず、こう言う。

「わたしたち、少しながく泊っていかない。そして、わたしたちも、こなぎ、草を採りましょうよ。それを、わたしたちも枕に入れて……」

あたかも青き波が揺れるような草原が、もう彼女の前にくり広げられているようだ。わたしは何を言うことができよう。せいぜいそのようであることを願うのみであった。

『干し草』の終わりは、「わたし」の深い吐息によって締めくくられている。「人びとの豊かで微妙な精神世界」が、ここには描き出されているといった方がいいのかもしれない。

「わたし」の吐息は、そのようでありたいと熱く願った熱望と、神聖な記憶の抹消が予測されることから起きている。草原は、単なる幼児体験の場としてではなく、自分の思考や感性の「核」を形成したものととらえられているが故に、神聖なのである。時間の不可逆性だけでなく、他者との共有も不可能なのである。「わたし」が、都会の娘である妻に理解されるようにと語った草原の思い出は、結局、互いに持ち合うことを願った情緒の核の共有にまで到らず、単なる事物としてのみ妻に伝わっただけなのである。「わたし」は、自分を妻へ理解させるため、可能なかぎり自分を剔抉してみせたが、剔抉すればするほど微妙にズレていかにざるをえない。

ここには、吐息という形で、人生の孤独が明確に意識されている。互いにどうしても理解しあえないもの

を持った「個」というものが表出されている。

都会と農村の格差、知識分子の意義、草原の転変を通じて窺える時代の変化など、王蒙が言う「時代が前進していく上でぶつかる種々の矛盾や衝突」があるが、それ以上に、この『干し草』には、時間と空間に唯一の存在として生きていかざるをえない人間、そういった「個」というものが表出されている。

このことは、少なくとも過去の中国現代文学にはなかったことではないか。人生の深みと個人の孤独が、この作品には表現されている。それが、私を含めた読者の、生への感慨を刺激し、その共有をもたらす。換言すれば、この作品には、事柄伝達を超えた抒情がある。この抒情は、他国の他者の共鳴を誘うものとなっている。

私は『干し草』は、一九八四年度の短編小説のなかでも、最高の収穫であると思う。

三

世界がわたしに初めて与えた記憶は、こうである。

わたしは祖母の懷に抱かれている。必死になり、そっくり返って泣いている。なぜだか知らないが、ひどく悲しげに泣いている。

窓から見える塀の、石灰が一部剝げ落ち、それが醜い爺じいじのような形になっている。

祖母は、わたしを抱き上げ、背をたたき、「おお、よし、よし——よし——よし——」とあやす。だがわたしは一層むずがり出す。すると、

「ほら、お聞き」祖母が突然言う。「早く。聞こえたかい……」

わたしはびっくりして、耳を傾ける。泣きやむ。美妙的音が聞こえた。ヒュルヒュルト、ユラユラと……鳩笛なのか、秋風なのか。落ち葉が軒を這う音か、それとも祖母のかすかな歌声だったのか。今だにわたしは決めかねている。

「おお、よし、よし——お眠りよ。あばたのお猿が出て来たら、わたしが打擲してやるに……」これは祖母の子守歌である。

屋根には揺れ動く光の影があり、それは盥の水が反射した日の光だ。光の影も、フワフワと、ユラユラとして、平和な夢の世界へ変っていく。わたしは祖母の懷で、やすらかに眠りにおちた……

同じくコンクールに入賞した、史鉄生の『祖母の星』の出だしである。

「わたし」は祖母に育てられた。祖母は器量良しのため、纏足され、文盲のまま育てられた。親の望み通り、地主の嫁となったが、大家族の中では、財力も地位も尊敬もない、ただ子を生むだけの、召使い以下の生活を強いられた。しかし解放後、祖母は「地主」成分となり、改造されるべき対象となった。祖母は、自らの解放のため、積極的に学習に参加し、字も覚える。やっと「地主」のレットルがとれ、喜んだのもつかの間、文化大革命が始まった。祖母は、「レットルのとれた地主」とされ、朝は道路掃除に参加し、午後は「防空壕」堀りに出掛けた。彼女の真面目な態度は称賛を受けるが、横丁の見張りに立つことは許されなかった。「反革命分子」は見張りに立つことはできないのだ。祖母は、ひとからまだ信じてもらえないのである。あの晩、その見張り番を頼まれ、喜び勇んで早くから出掛けたが、やはりいざとなると他人がやって来て、見張り番はできなかった。その晩、脳溢血で死んだ。一九七五年のことで、祖母七十三歳であった。

『祖母の星』は、もと地主であった祖母の小さな誠意を描くことによって、それを翻弄し圧殺した歴史を照らし出す。無念のうちに死んだ一人の女の、ささやかな願望を掬い上げることが、その生活を解放することもできなかった「革命」が、愚劣な行爲として浮かび上がってくる。

七二年、わたしも北京に戻って来た。その年、祖母は七十歳で、髪はまっ白になっていた。父も母もどちらも雲南の幹部学校へ行ってしまつて、またもや、わたしと祖母が残された。或いは、祖母がわたしにつき従つたと言つてもいい。

わたしはもう二十を越えていた。わたしは、歴史とは何かわかつていた。多くの事は、決してひとの善悪によるのではない。事の善悪を人びとがまだ明白にしていないことによるのだ。例えば祖母。彼女は、地主がなぜ悪いかまだ明白でないうちに、地主として決定づけられた。これは運命と言えるかもしれない。

しかし革命とは、まさにそういう悪い運命の中から、人類すべてを解放するためのものではないのか。

だが、『祖母の星』は、声高に「革命」への不信を叫ぶ作品ではない。人びとの愚劣さが集積してしまつた「革命」にせよ、「わたし」の半生もそれに関与しているからである。従つて今は、大情況に翻弄され圧殺されたごく微細な存在に、ひととしての尊厳や人生を見ようとする。

夏の夜、満天の星空。祖母が語るお話は、地上でひとが一人死ぬと空の星が一つ消えるというあの話

とは違って、地上でひとが一人死ぬと、空に一つお星さまが増えるのだよ、というのだった。

「どうしてなの」

「ひとは死ぬと、お星さまになるのさ」

「どうしてお星さまになるの」

「夜道を行くひとを照らしてあげるのだよ……」

無数に存在する星の一つになるにすぎない人生も、逆に言えば、どんなにささいでつまらぬ平凡な者、地主であつたとして差別される者、はたまた作者史鉄生がそうであるように、身体障害者であつても、人生の先達者として夜道を照らす一つの星になれるのである。その一つ一つが寄り集まって、はじめてあの無数な星の世界ができるのである。

ここには、大情況よりも小情況としての個人、平凡な個人の人生に、かけがえのない価値を見出そうとする視点がある。存在としての「個」の尊厳を注視しようとする姿勢がある。

もつとも、描き出される祖母と幼児、生と死と、人生の対極にある両者をつなぐ肌のぬくもりとお話は、きわめて甘美であり詩的であるのだが、あまりにも童話的で、ナイーブな情感にもたれすぎている。だから、「わたし」も作者もそうであつたように、「われわれの時代が前進していく上でぶつかる種々の矛盾や衝突」が、いつまでもこの童話的な世界に浸ることを許してはくれなかつたのである。

四

宋学武『干し草』、史鉄生『祖母の星』に共通する人生への吐息は、平凡な人物にも確固とした生命の燃焼と尊厳があることを感じさせる。この価値を、大情況に対してうち立てたいとする吐息なのである。

「不公平な、愚劣な、不条理な大情況と闘う平凡な個人を描いた作品に、陳世旭の『大浪』正・続がある。

この作品は、猛威を振るう洪水に立ち向かう四人の人物を描くのだが、洪水という自然の異常事態よりも、むしろ不条理な人間社会と闘う人物が描かれているといっている。運命の浪に押し流され翻弄されて終わる人生に抵抗する個人の尊厳が描かれる。

例えば、その三「ヘッドライト」の胡月生^{フイェンシヨウ}である。

かつて高校の同窓であった夏邦清^{シアバウチン}が県知事となり、この専区一帯の防水責任者としてやって来る。彼は、高校卒業後大学へ入り、出世コースを歩む。唯一の不幸であった文化大革命も、彼は郷里に戻り配偶者に恵まれた。その彼女は、胡月生の恋人であった。以後、胡月生は夏邦清と絶交し、幹部を嫌うようになる。もともと能力のある胡月生は、高校卒業後郷里に残り農業をやる。彼は何をやっても上手く、トラクターまで手に入れるが、世をすねた生き方をし、放恣な暮しをしているうち、不惑（四十歳）を越えた。勿論、共産党員ではない。

まるで世の中の事は、胡月生がちよっと手を下しさえすれば上手くやれ、「素晴らしい」と称賛されるためにあるようであった。確かに、彼の知能は人に過ぎ、天分も極めて高かった。夏邦清のような、当地

の者が誇る大物とくらべても、違いは、初期の一步でしかなかった。

だが、この一步が、彼らの運命に大きな隔たりを生じさせたのだ。片や愛情に恵まれた幸運児。片や不運の失意びとというように。一方は何十万人の管理者で、一方は管理される何十万人の一にすぎない。

「能ある者必ずしも遇せられず」

胡月生自身も、他人さえも、いつもこう嘆息していた。

堤防の下から漏水が始まった。漏水は水柱となる勢いで危険が増す。穴を塞ぐため、十五センチほどの丸い栗石を入れた袋や雑囊などが投下される。が、効果なく、浮足立つ人民公社の者に、夏邦清は「共産党員は残れ」と命じ防水に挺身する。この声に思わず寒けを感じた、党員でもない胡月生が、栗石を満載したトラクターをバックさせ、車ごと堤防下の漏水口に突っ込む。穴は見事に塞がれ、暫時しのぐことができた。まもなく対岸の堤防爆破により、危機は避けられた。しかし胡月生は、トラクターの下敷となり息をひきとる。

車の下から引っぱり出された胡月生は、顔面蒼白、眼鼻がひしゃげ、一貫して持ち続けたあの嘲笑の様をしていた。また、運の悪さを怨んでいるようでもあった。

逆さまに落ち込んだトラクターは、エンジンがまだ切られていなかったため、ガタガタと前輪を空転させている。それは、全力をふりしぼって地獄の入口を脱出しようとしているようでもある。運転台の前方には、二本のまぶしい光の柱が、一方は高く一方は低く、今まさに来たらんとする夜のどぼりの斜め上方に向け、照射している。

誰だつてわかりはしない。トラクターをバックさせるというのに、胡月生はなぜヘッドライトをつけねばならなかったのか。

『大浪』には、このように不遇な男の、最後に燃焼する光芒が描かれる。決して党员として選ばれた者の話ではない。むしろ馬鹿にされ、見棄てられる平凡な人物の意地が描かれている。その一「宿怨」の敵とみなす書記の息子に父を助けられた春甫、その二「烽火」の、結婚を餌に保身をはかる李欣を見捨てる秋霞、その四「熱き土」の「のろま」と仇名される鄒鳳求。どれも、洪水という異常事態の下に見せる上役や党员などの利己主義、驕傲や狭隘、こういつたことに対する、微細な人物の意地を体现している。即ち、不条理な社会に対する個人の尊厳の精一杯の発露が描かれる。

だからといって、彼らはしかるべき報酬をえられるわけではない。彼らには、世の不公平といった価値判断は、エゴイズムと同次元のものとして振り払われているのであろう。人間の尊厳といったものは、むしろ付加される価値から脱却した時にこそ生ずるものであるかもしれない。闇を貫くヘッドライトの光は、静かで透明である。ここに、人生のかなしみが感じられるのではないか。

五

若い革命者がその力を発揮できぬ間に、老獯練達の者の術に陥ったり、そういう者の織りなす「現実」に取り込まれるさまを描いた作品もある。金河「網で漁する者と竿で釣る者」や鄒志安「おお、若駒よ」がそうであるが、今、陳冲「小さな工場に大学生が来た」(原題、小廠来了个大学生)について少し触れよう。

杜萌トウモンという大学卒業生が、地方の工場へやって来る。彼は、路工場ロウカ長の家父長的で派閥主義の管理運営を現代的なものに改善しようとする。「管理の現代化」という時流に乗って、知識分子を飾り物として雇用しただけの路工場長は、彼の意見など採用しない。製品にミスが生じた時、調査に来た上級の者に、杜萌は如才なく対応することができず、ただ自分の正しさだけを主張し、調査員を怒らせてしまう。工場は窮地に陥ったが、工場長の腹心の者が病いをおして奮闘し、別の注文をとり、工場閉鎖をまぬがれさす。工場運営が回復すると、路工場長は、口先だけの飾り物杜萌をクビにする。一人の女工の励ましを受けて、上級の局へ抗議に出掛けた杜萌が、そこで目にしたのは「未決箱」に置かれたままの、自分が先に提出した意見書であった。

『小さな工場に大学生が来た』は、種々の現在的問題がちりばめられている。都会と地方、大学生、管理学、輸出、こういつた現代、舶来、欧米、知性、新しさと封建、土臭さ、勘、沈滞。まさに王蒙が言う「種々の矛盾や衝突を明示し」「新しい時代の改革者を形象することにつとめ」た作品である。

しかし、この「革命者」は、「飾り物」として現状に位置づけられ、「正しさ」を表現していない。この作品が意識したであろう、王蒙の五六年の作品『組織部に新しく来た青年』（原題、組織部来了個年青人）では、党の組織部の沈滞し腐敗した部分を摘発する青年が「正しさ」を表現していた。

八四年の「革命者」杜萌などは、もはや単純明解に「正しさ」を表現しない。勿論完全無欠でもなく、遅ましくも不屈でもない。彼らは成功しないし、分厚い現実には跳ね返され、挫折する。ただ、彼らは、現実に向かつて猪突猛進してそうなるのではない。ちょっと動いただけで、自分を取りまくソフトでしたたかなし、

がらみに捕獲され、身動きできなくなるのである。それだけ現実は厳しくなっているのだが、それだけではない。

ただ杜萌が間違っていた点もある。管理が現代化される時代は、決してスムーズに、向こうから歩いてやって来るのではないのだ。書類一つ、意見書一つで、それで実現するというものでもない。そこには闘争がある筈だ。何度か蒸し返されるせめぎ合いがある筈だ。しかも、彼にはうまく闘う準備がなかった。うまく行動しようとさえしなかった。意見書を書くことだけで満足しているようでは、学校でレポートを書いたり、研究所で学術論文を書くのと、何の変わりがあるろう。もともと事務処理と行動能力を欠く上、主観上不注意なら、どうして壁におつからないわけがあるろう。

このように、主人公は自分の位置や能力を自省する賢明さを備えている。ここに「新しさ」があるのかもれない。

王蒙は『組織部に新しく来た青年』という作品によって、「右派」とされた。同じく「右派」にされたことのある、この四十八歳の作者陳沖の作品は、それだけ現実理解が複眼的になり、深まったと言えるだろう。

以上、私は、第七回短編小説コンクールの入賞作品のうち、特徴ある作品について述べてきた。まだ他に述べたいこともあるが、今は、作品から人生への吐息とでもいえるような息づかいが聞きとれるということのみにしておく。これは言うまでもなく、社会とか時代とかいった大情況に対峙するような「個」の存立を

確立する視点からなされ、それが人生や文学を深まりのあるものとしているのだが、随分苦味が濃くなったともいえる。

文化大革命などを経て、処女性を失った中国文学界は、人生に深みを増したようだ。人生の理解に磨きをかけているようだ。

しかし解放後三十五年、恋愛論は深まったが、恋愛そのものが薄れていく感をまぬがれないのである。

五 一九八二、八三年の文学情况

一

陳吉蓉という、あまり有名でない、天津の女流作家の「靴修理店の話」(『人民文学』八三年七月)という作品がある。話の筋は、ある町の、小さな陰気な靴修理店に、若い娘吉娜ヂイナがやって来て、笑いとアイデアで店に活気を呼び商売も繁盛するが、おやじがヘマをしながら、つい面子から吉娜の方を罵ってしまう。彼女がやめて店がまた元の木阿弥に戻るといふものである。作品は次の言葉で終わる。

その後しばらくして、この店の入口があざやかな赤色に塗り変えられた。だが、吉娜がまたこの店に
来たのかどうかはさだかではない……。

一読、どうということのないこの作品を、最後の思わせぶりな言葉から、ひとつのメタファーとして読むなら、これほど見事に、文学界の現状を伝えるものはないと思える。

一九七八年の三中全会以後、パツと花の咲いたような時期、それを、この吉娜というバタ臭い名前の娘の出現が象徴している。

景気が良くなつて、ミシンを購入する頃から、かげりを見せ、自尊心ばかり高くてそのくせ能なしなおやじの罵声によつて破局が来る。ミシンを現代派文芸思潮に、おやじを文学官僚などとして読むことができる気がする。ドアをまっ赤に塗り変える新たな作家たちが、またぞろ現われるという風に。

一九八二年九月の十二全大会以降は、現に、作品にのびやかさがなくなつた上、愛国的なものが多くなつている。

作品をこのような絵解きに読むことは邪道であろうが、そもそもが図式的な中国の小説において、このよきな読み方が十分に可能だと思わせる雰囲気、一九八三年後半から復活していると言つてよい。

二

一九八三年八月号から、『人民文学』の編集部が入れ変わり、王蒙主編、劉劍青副主編となつた。嚴文井が顧問として居座っているにしても、若返りがなされた。若返つたと言つても、年齢だけで、若々しい主張とか実作が出たというわけではない。その「文学のためばかりではない」と題する編集部宣言が、「人民の精神を豊かに高めるために」「国を憂い民を愁い、国を利し民を益する作品」を呼びかけていることで明らかである。まさに、作品に、国や人民へ有効性をより強く發揮するよう要求しているのである。

九月号は、その実作集とでも言える、短編小説特集が生まれ、蘇叔陽「額縁」、汪曾祺「故里の三人の陳」、林斤瀾「上向きの唐がらし」、王蒙「灰色鳩」、蔣子龍「足指の手入れをする女」、瑪拉沁夫「軌道」など一

篇が掲載されている。

巻頭を飾る、蘇叔陽「額縁」を見てみよう。

作家である私の窓から、通りの風景が見える。左に有名な四川料理屋がある。この店からは、「きまりはきまりだ、飲め」などと賭けをして酒を飲む若者の声が聞こえる。拳句の果ては喧嘩だ。その前で、そら豆などを売る瘦せたじいさんがいる。その味はうまいと大褒評判である。右はちよつとした公園で、肥ったじいさんがいる。見るからに強そうなこのじいさんは、自転車預りを無給でやっている。ある小雨の日、私が通りに出ていると、ジーパンを穿いて、ヤマハのオートバイに乗った若者がやって来た。言葉は乱暴、態度も横柄で、自分の都合しか考えない。私に泥をはねておきながら、あやまりもしない。その上、オートバイを濡れないように番をしておくと、肥ったじいさんに命じたりする。この若者は、瘦せたじいさんの元の弟子で、じいさんに酒を無理に置いて、そら豆を買って料理屋へと消える。瘦せたじいさんは、賭けを始めた弟子を呼び、酒とそら豆の代金をつつ返して、家で本でも読めと帰らせる。オートバイはと見ると、肥ったじいさんが、違法駐車は交番へまわしたよ、あそこなら濡れまい。書類を書いて、社会のきまり通り受けとれと答える。私在家へ帰る途中、小学校の教室から、補習学級の英語の声が聞こえて来た。帰って窓から見ると、例のヤマハの若者が、肥ったじいさんに手を振って走り去った。

若者のふしだらな態度が、老人の社会奉仕と対比して描かれ、社会のきまりを守れという意見に貫かれた作品である。同じ若者でも、仕事後も苦学している者がいるのにと、チョコツと触れられ比較される。図式的で、意見や気持ちすべてにチョコチョコと触れ、社会のきまりをちゃんと守れという主張に収斂してしまうとき、効果ばかりが先走った、内容のない作品で、こんな作品が多くなるのかと危惧を覚える。

王蒙の「灰色鳩」はどうか。

田舎から出稼ぎにやって来た二二歳の青年が、一銭をも惜しんで大工仕事をしている。昨年は一〇〇〇元ためた。今年は二〇〇〇元ため、合計三〇〇〇元ならば、村の娘彩雲も結婚にウンと言ってくれるだろう。そこへ灰色の鳩が飛んで来た。青年は、故里の鳩を思い出しつつ捕まえて食べようとするが、鳩は大通りへ飛んで逃げ、急停車したバスの下へ入り込んだ。青年がバスの下へもぐって捕まえようとすると、鳩は飛び去った。バスの下から出て来た青年を、みなは、身を挺して鳩を助けたものとみなして拍手で迎える。「あなたは本当に素晴らしいわ」とまで女の子に言われる。青年は、三〇〇〇元よりもっと良い、本当に素晴らしいこのために泣いた。

現金(物質)とそうでないものが図式的に対比され、青年が好きな娘彩雲は、一万元を積んでも、「あなたは本当に素晴らしいわ」と言うはずがないと言わんとする作者の意図は、明白である。明白すぎるくらいだが、何かを落してしまったような、無残な読後感が残る。

ついでに、蔣子龍「足指の手入れをする女」について触れておこう。中国の公衆浴場にいる、客の足や足の爪などの手入れを仕事とする、若い女黄玉秋が主人公である。

市の文化局幹部が、上海型の自動車で、彼女を迎えに来た。有名なバレエの踊り手鄭西賓が、右足の親指を腫らして踊れなくなつたのだ。医者は、三カ月ほど演技できないと言う。やむなく呼ばれたのが彼女である。彼女が診ると、爪が肉に食い込んで、そこに膿がたまつた、よくある傷である。今夜の舞台にも立てると保証し、早速手当てをする。彼女の腕前と誠意に鄭はすっかり感動し、バレエ「オネーギン」の切符をくれ、演技終了後、彼女の座席にまでやって来て礼を言う。黄玉秋は、三〇近くなつて初めて、若い男から心

からの感謝の言葉と接待を受けて心踊るのであった。

社会から軽視されている職についている女と、華麗な世界にいるバレエの踊り手という対照的な人物を描いて、精神的な美しさを確認させようとする作品らしい。社会や伝統の力が強いのに、一人の娘の善良な意志の力ではどれだけ持ちこたえられるかと、作者が作中人物に語らせるほど、中途半端で力弱いものに終わっている。

『人民文学』八三年九月号から、以上三篇につき触れたわけだが、どれも意図のみが躁急で、内容が伴わない。若者の苦悩が、随分おざなりのタッチで扱われているではないか。また、若者の現在の生をとりまく環境そのものへの目がなくなっているではないか。環境が複雑で多層的であることを指摘し剔抉してきたのが、短編小説の役割でもあつたはずだ。

三

一九八二年の良質な短編小説は、やはり優秀作品コンクールに入った二〇篇の作品である。その中で注目すべきことは、辺境の描写である。辺境は、まず五七年の反右派闘争と、六五年からの文革という、過去(歴史)とのつながりを持つ地なのである。

梁晓声「ここは神奇な土地なり」(『北方文学』八二年八月)は、文革中、北大荒(黒龍江省)に開拓に行った若者たちが、自然の猛威の前に倒れていった話である。いつも先頭に立つ、最も革命的な言辞を弄する女子隊員の、ふと見せた人間性が、主人公に愛を芽生えさせる。彼ら知識青年は、より革命的になるため、条件の一層厳しい奥地へ行く。苛酷な自然条件下に、男女四人の若者の烈しい愛憎が、純粹な形で展開され

る。純粹故に無益となる、そういった人の生のかなしみが、この作品にはある。それは北大荒という北の果ての、更に奥地の神奇な土地が吐露させた心情かもしれない。

このことは、王蒙「雜種の馬」(『收穫』八一年第三期)を思い出させる。新疆の山へ、老いぼれた雜種の馬にまたがって入ること、ただそれだけを、意識の流れといわれる手法によって描いた、筋らしい筋のない作品である。大自然の圧倒的な力が、管理され方向づけられた日常生活を、木端微塵にする。辺境の大自然に身を置くことで、作者は初めて、人物をして人生なり、生きることを思考させることができるとも言える。もともと王蒙は、この辺境の渺たる個人が、一個の堂々たる中国人となることを描くのも忘れない。

鮑昌「芟芟草」(『新港』八二年八月)は、鉞山関係の技術者である父が、右派とされ蒙古へ行き、積極分子として病軀に鞭打つて新疆へ行き、文革で更に労働改造にやらされ死ぬ。祖国の利益のために死んだ父を讃える息子「私」が語る話である。

辺境は苛酷な自然条件を持つ。文化果つる所である。その地を開拓せんと、血も涙も流し、命までも注ぎ込んだ人々によって、今や祖国の一部として復活しようとしている。

張亦嶠・張亦崢「雪原よゴビの砂漠よ」(『龍沙』八二年第六期)は、文革期の青年の意気込みを再評価し、保身のために大学に残りたがる者を批判し、祖国大地の開拓という大事業に身を投ぜよと叫ぶ。北大荒に勇んで行ったことのある兄が、今大学に戻り、研究者になろうと汲々としている。同じ大学の弟が、大西北(新疆)へ行くと言うのを思いとどまらせようとする。弟は、兄も文革時には情熱に燃えて下放したではないか、辺境開拓が自分の事業だと言い残して出掛けてしまう。唐棟「兵車行」(『人民文学』八三年五月)は、喀喇崑崙山(新疆)の辺境守備隊へ巡回に行く女衛生兵と、かつて彼女を救った兵士との清い悲恋を描く。

辺境は美しいばかりでなく、貧しい地でもある。その貧しさを描いた、扎西達娃「川の向う」(『西藏文芸』八二年第五期)は、チベットを舞台に、貧しさ故に川向うへ渡る娘と、好きでありながらこの娘を乗せて船を漕ぐ若者が描かれる。蔡測海「遙かなる伐採の音」(『民族文学』八二年一〇月)は、辺境に住む大工の娘が、父の弟子で婚約者である若者に物足りず、腕はないが世故にたけた男と川を下つてしまう話である。貧困は、生活の単調さと文化の貧弱さでもある。鉄凝「ああ、香雪」(『青年文学』八二年第五期)は、汽車が通るようになった村の娘たちが、僅か一分間の停車から嗅ぎとる都会や文化の香りへの憧憬が描かれる。ここには、若い娘の強い脱出願望が無理なく描かれているが、似たような素材でも、八三年になると図式的で作画的になる。

葉蔚林「いぐさの麦わら帽」(『上海文学』八三年九月)は、ある山中の若い嫁が、実直だが金もうけしか考えぬ夫に不満で、手仕事の楽しさや模様の色などに工夫をこらす行きずりの行商人に、心をこめて作ったいぐさの麦わら帽を、請われるままやつてしまう話である。文化への憧憬に手がこんできて、それだけリアリティが薄れ、金(物質)よりも文化(精神)が要求されているのだとする作者の意図が露骨になってきている。

四

農村を扱った作品では、生産責任制の成果がとり入れられるが、さすがに単純に裕福になる話ばかりではない。金河「未練ばかりではなく」(『人民文学』八二年一月)では、生産隊の家畜を各戸に戻し、自ら指導してきた集団化の方針の敗北を認める老書記の心情が描かれる。矯健「霜じいさんの苦悶」(『文匯』月刊

八二年一月)では、単に個人的金儲けのみを計らぬよう監視するじいさんのことが描かれる。また、村長に一票差で当選した若者が、自分の選挙参謀の悪癖である賭博をやめさせるため、就任に当たり賭博追放を宣言し、再投票の結果八割も得票するという、徐朝夫「就任宣言」(『雨花』八二年一〇月)のように、農村に根強い賭け事も描かれる。

王大鵬「荷受け珍談」(『青年作家』八三年一月)では、駅の荷受けをめぐる、駅員の横暴さと、正義漢の大学生をしてずる賢い農民の様態が描かれる。情勢をにらみ、こずるく立ちまわる農民、ふてぶてしい農民の形象もある。矯健「貯金」(『人民文学』八二年九月)の、一〇〇元が五年後三九・六元の利息を生むと知ってやみくもに金のために働くじいさん。権文学「九まがり十八くまの山奥にて」(『山西文学』八三年九月)では、新婚夫婦の手紙を盗み読んで平気な山の男たちが出てくる。どれも作者によって批判的に描かれてはいるが、こういう泥臭い人物の形象は、彼らと闘う側の人物形象よりも、ずしりと手ごたえがある。その中で、徐孝魚「古墳」(中編、『収獲』八二年第五期)が、盗掘人と文物管理所の役人という関係を軸に、農民のずる賢さと、お上に対する卑屈さを描く。人民における国家というものの実態が、農民の「奴隸根性」を描くことによつてとらえられている。

五

国家というものが作品に現われるのも、八二年の後半からである。日本の資本家の言うままになる中堅幹部と違い、資本家の不正を指摘し、中国のため支出を減らした若者を描いた、羅来勇「世界は彼らの前にひるがる」(『解放軍文芸』八二年九月)を始め、祖国に損をさせないことを共通の理念(大義名分)として、

対立した双方が和解することを描いた、曲一日「強き龍」（『安徽文学』八二年一月）や趙曰茂「欠字」（『海鷗』八二年一月）、康雲・楊長瀛「滾球記」（『山東文学』八二年一月）などがある。

また、鄧剛「八級技師」（『鴨綠江』八二年一月）では、アメリカから来た技師及び機械に対して、中国の最高級技師として意地を見せる親方が、弟子と協力する姿が描かれる。さらに、高纓「朝に辞す白帝彩雲の間」（『四川文学』八三年一月）になると、三峡下りの船中で、若い女流画家が、劣悪な条件下に中国画の精神を、フランスの歴史家夫妻に伝え、フランス人の称賛を得る。

国家が、依拠すべき理念として、諸矛盾を切り捨てて、徐々に光度を増していると言える。

六

蔣子龍「年始まわり」（『人民文学』八二年三月）の工場における沈滞と退廃。張宇「トップニュース」（『北京文学』八二年二月）のように、金を寄付する善行が却って人々の不信や抗議を招くという社会の疲弊を突く作品もある。一九八二年『北京晩報』一分間小説コンクールで一位になった、許世傑「あるヤカン購入申請書」（六月九日）は、軍隊でヤカン一つを購入するのに、申請書が半年もたらい廻しされ、まだ、担当者の責任転嫁で買えないといった官僚主義批判のものであった。同じ作者の「いやです」（『小説界』八三年第二期）は、幼稚園に勤めるのを「いやです」と断った待業青年の娘が、保母の質の悪さを知って、祖国の未来である子供たちのために、この幼稚園で働こうと決意し、母親の帰宅を促す言葉に、「いやです」と返事するショートショート（小小説）である。どちらも巧みな佳作だが、一年の隔たりを見事に感じさせる。

ついでながら、小小説の方が、短編小説の問題提起と別決能力を、より鋭く発揮している。呉若增「面の

皮の落し物、ほか二篇」(『人民文学』八二年一月)は、顔の表皮の落し物があつたという揭示を見て、局長や大学教授など心当たりの者が次々来る話。また「腹の中のトラクター」は、外国製トラクターが腹の中に入ってしまった病人を、老漢方医が、大地の土で作った丸薬で治癒する話である。汪曾祺「尻尾」(『百花園』八三年四月)は、ある昇級問題を描くが、カエルがオタマジャクシの頃にあつた尻尾まで追跡調査されるのではないかと心配して泣く寓話に凝縮する小小説である。

張一弓「試験」(『北京文学』八二年一〇月)は、国民党軍少佐の兄がいたため、共産党員になれなかった四六歳の女が、晴れて入党できる話である。彼女のいる玉器製造工場に、貿易商として兄がやって来た。彼女がうまく商談をまとめたのである。張潔「条件はまだ熟さない」(『北京文学』八三年九月)は、副局長に選ばれたのが党員の支部書記ではなく、大学同期の研究者で非黨員の方であつたという話である。支部書記は、策を弄して非黨員の昇級を邪魔するが、中年知識分子活用という政策の前に敗れる。この二篇の短編小説とも、党を扱ってはいるが、事を語るに急で、事柄の衝撃力は既がない。

七

王左泓「快樂王国」(『小説林』八二年一月)のように、殆んど文盲だが陽気な荷上げ人夫の恋を描く、青年を扱った作品がないわけではないが、老人を主人公とする作品の方が多い。既に触れた以外に幾篇か挙げれば、老人故に描ける過去(歴史)への感慨という視点もあろう。荒れはてた斜面を見事なとうもろこし畑にして死ぬ、何士光「とうもろこしを植える老人」(『人民文学』八二年六月)や李本深「大きな柳の木の下の伝奇」(『希望』六八二年一月)林斤瀾「上向きの唐がらし」(『人民文学』八三年九月)などにも、大

躍進や文革が影を落している。また、一見平凡な人生から、偉大な事蹟や教訓を引き出せることであろう。丁建順「新安江上流の伝説」(『安徽文学』八二年九月)の、橋を建てるために金をため込んだ渡し守の話や、遲松年「秋の別れ」(『人民文学』八三年三月)の、職場のためにテレビを買い置いて退職する用務員のじいさんなど。そして、頑固に徹して時流に逆らうのも老人なるが故である。佳俊「中秋の月」(『人民文学』八三年一〇月)の、市の党書記に、清廉潔白な幹部になるよう説く老戦友とその妻。郭建華「姜守本町へ行く」(『山東文学』八二年十二月)の、公金をチョロマカしてまで儲けたくないと、自分で作ったホウキを安売りする老人などがそれである。

また、老牛の心を描き、世代交代の厳しさを描いた、孫少山「急な坂」(『北方文学』八三年八月)。海に生きる厳しさを通じて世代の交代を描く、鄧剛「人を迷わす海」(中編、『上海文学』八三年五月)や、父子の違いを日記体で描いて成功した、沈泰来「チューリップと海棠の葉」(『広州文芸』八二年一月)などがあつた。沈泰来作品には、事を語ることで終わる他の作品と違って、作者の思考がぶつけられている。

鹿や馬や海といった特殊なもの(自然)を対象にし、それとの葛藤や交情を通じて、人生を考えさす作品もあつた。烏熱爾圖「七本角の鹿」(『民族文学』八二年五月)や張承志「大坂」(『上海文学』八二年一月)、「黒い駿馬」(中編、『十月』八二年第六期)、「春」(『北京文学』八三年六月)や鄧剛「エビ」(『鴨緑江』八三年九月)など。この中、張承志「黒い駿馬」は、中国に初めて現われた愛情物語といつてもよい作品である。

猫と犬を主人公にして(葱とニンニクとゴマ塩をちよつと) (『上海文学』八三年九月)、ある断念を表明した張潔は、「もの思う山なみ」(『新觀察』八三年第一八期)で、灤河から天津へ取水した工事の責任者周啓

明のルポルタージュも書く。周の経歴や工事の困難などはサラッと描き、科学的なことや経済上のことといった実務面を浮き彫りにしている。

多くの者は、創造力よりも批判力に富み、さらに評価決定は外部の権威によつてなされる。実務家というのは、常に日の当たらない縁の下の力持ちにすぎないことを描く陸文夫の「塀」(『人民文学』八三年二月)の構図は、中国のみならず日本を含めた庶民社会の縮図かもしれない。

六 一九八四、八五年の文学情况

一

ここに扱うのは、八四年と八五年の作品である。

八四年の短編全体の主旋律として、人生への嘆き、があった。

地主へ嫁がされたばかりに、七三歳で死ぬまで、階級烙印を背負ったまま死なねばならなかった、史鉄生「祖母の星」（『作家』八四年四期）。大洪水という自然の猛威を前にして、地位名誉利害といった人偽的虚飾をこえた精神、すなわち人間性なるものを描いた、陳世旭「大浪」（『人民文学』八四年三月、九月）。東北の片田舎での思い出を通じて、一回かぎりの人生の孤独を感じさせる、宋学武「干し草」（『青年文学』八四年二月）。矯健「快活な画家」（『人民文学』八四年二月）では、親切心から、気絶した女を背負って医者へ運んだがために、その精神に異常のある女と結婚せざるをえなくなった画家が出てくる。彼は「世の中はあまりにも不公平じゃないか」とつぶやくのである。

これらの作品には、平凡な個人を通じて人生にかかわろうとする作者の主体があった。

八五年は、作者の知識素養も深くなり、文章技法も巧妙になつてゐるのに、作品がつまらなくなつてゐる。何かが欠けている。少なくとも、生き生きした魅力には富んでゐない。世の不公平を摘発したりする主体が、少なくなつた。むしろ、そういう主体を露出しないところで文学を成立させようとしている。それが、王蒙の導く文学の道のものである。

彼の「冬の話題」(『小説家』八五年二期)が良い例である。八三年一月二日から翌年の二月まで、V市で起きた、入浴は朝すべきか晩すべきかという論争を扱つてゐる。晩にすべきだとする、六三歳の斯界の権威と、「カナダ人は、朝、起床後入浴するのを好む」と書いた、少壮のカナダ留学帰りの動物学者との争いである。もともと争いなどがないのに、とりまき連中が騒ぎ立て、争いになつたのである。「沐浴学発凡」という蘊蓄を傾けた本にせよ、ここには針小棒大な馬鹿騒ぎがあつて、作爲のみが苦い味として残る。王蒙はたぶん、卑俗なことが、ふとした誤解から雪だるま式に肥大して、当人たちを巻き込んだ流れになつてしまふこと、そういう世態を描いたのかもしれない。八三年一月から、とわざわざ明記していることは、現実の「精神汚染除去」運動を意識して、それを戯画化したのかもしれない。しかし敢えて言えば、作者は一方に加担して他方を皮肉るわけでもない。まして、種々の社会弊害を摘発して、時代や社会と切りむすぼうとするわけでもない。作者の主体は、この作品では、どの人物にもどの事件にも、かかわらうとしてゐないのだ。むしろ、主体を諧謔のレトリックにおしとどめ、矮小な事柄の大袈裟な装いというギャップによるおかしさのみを追求している。

王蒙は、作家協会副主席であり、『人民文学』編集長でもある。党中央委員会候補委員でもある。これまで、彼の質の高い作品は、手法の試みとあいまって、現在の中国文学の傾向を規定してきた。その王蒙が「冬の

「話題」で、主体を技法におしとどめ、専らおかしさを追求する道を示してみせたのである。この道は、換言すれば戯作の道だ。理想性や社会性が生々しく出てくるわけではないのである。この意味で、「脱政治」の傾向を代表しているともいえよう。

短編ではないが、報告文学（ルポルタージュ）の分野では、生身の人間の生き方を報告するが故に、社会や時代と無縁であるわけにはいかない。作家協会副主席の劉賓雁の「第二の忠誠」（『開拓』八五年創刊号）三月）は、最も良く彼の主張を伝える。

党への忠誠には二種類ある、と劉賓雁は言う。第一は、党の上級指導者の言いなりになる忠誠である。第二は、上級の不正を批判する勇氣と思考である。第二こそ真の忠誠であると、党の不正を摘発している男二人を紹介報告する。そして、今まで、党に最も忠実な男とされてきた、若い解放軍兵士雷鋒を、第一の忠誠型とし、雷鋒は自分の頭で考えず、ただ教義を暗記して適合させただけの男だと言いつける。毛沢東が六三年提唱してくり広げた「雷鋒同志に学ぶ」運動を、人民を愚弄するものと批判するのである。

劉賓雁は、八四年初め『人民日報』紙に、「穀物だけの問題ではない」（八四年一月六日）、「姿なき機械——おざなり整党の反面教材」（八四年二月八日）、「白衣の下の汚濁」（八四年二月二五日）と、たて続けに報告文学を発表し、整党の不十分さを指摘し、知識分子の不当な待遇を告発した。彼は、「人間と怪物の間」（『人民文学』七九年九月）以来、党の不正を摘発批判することこそ愛党の精神である、と一貫して主張している。劉賓雁の道は、主体を思想として展開し、さらけ出す道である。「白衣の下の汚濁」が西安で裁判沙汰を引き起こしたり、「第二の忠誠」の続編が発行停止処分にあたりたりしたように、時の政治とわたり合い、その圧力をもろに受ける、危険な道でもある。

八五年一月六日、作家協会副主席に選ばれた、陸文夫はどうか。

「門鈴——横丁人物志12」（『人民文学』八四年一〇月）では、反右派闘争以来、小心翼翼とかしこまって、影のような人生を送ってきた男・徐経海を描く。徐は、門に鈴をつけ、人が入って来た音によって居ずまいを正して、自分の内的生活を他人に見せないようにしてきた。こうして幾多の政治の波をくぐり抜け、やっと中級幹部になったのである。ある日、元右派分子の孟得怡が、建築の請け負い仕事で今は羽振りが良くなくて、急に訪れる。孟は、現在の豪勢な生活を旧友に自慢して、忙しげに帰るが、その時、門鈴が落ちた。徐は、自分の生活態度が間違っていたかと思うが、新式のプザーに換えようという娘の要求に、「やっぱりつけておこう」「ああいった正道を歩まぬ奴は、いつかまたひっくり返るに違いないのだ」と首を横に振る。

陸文夫は、市井の小人物に密着することによって、庶民の処世術を摘出してみせる。淡々とした語りから、かえって時の流れと社会の広がりが見える。

ところが、「通りに面した窓」（『小説家』八五年一期）では、窓から見える老芸人と、彼と同業だった男の娘の話なのだが、西施を主人公として美の崩壊をテーマとする脚本が、経済犯を扱った脚本に変わったうえ、入選し、その褒賞として、老芸人と娘が広い家に住めるようになる筋書きは、いささかドタバタし、何かが欠けているような気がする。

同じことは、汪曾祺にも言える。「日時計」（『雨花』八四年九月）で、三七年の昆明西南連合大学を扱う。アメリカ産ラジオオラスの栽培で豪勢な化学の教授の隣りに、奨学金だけで暮らす生物学の助手がいて、日

時計を作り、規則正しく生活し、勉強に打ち込んでいた。駆虫剤を調合してくれる助手に、教授は感謝していたが、鶏スープ一杯飲ませるでもなかった。助手は、栄養失調による肺結核で死んだが、日時計の竹箸の影は死後も動いている。読者は、淡々とした語りから、三七年や昆明という特殊な時空をこえた何かを、感ずるに違いない。

だが、「郝有才のエピソード」(『大西南文学』八五年九月)になると、エピソードのおもしろさを積み重ねるだけで、背後にある時代や人生とかかわろうとはしていない。

郝有才というごく普通の男の、こずるくて細かい生活ぶりが幾つか紹介される。文革中、食堂で羊の蹄を五個かすめ盗ったことがあった。見つかり、反省会にかけられる。だが、彼の生い立ちからの話は苦難に満ちていて、劇団の同僚たちの涙を誘った。しばらくして、魔法瓶を割った時、自腹を切って買い換えたので、今度は表彰されることになった。文盲の郝は、軍人の指導者から、表彰大会ではどう話すべきか吹き込まれたが、当日は、方言まる出で言い間違え、会場を爆笑の渦と化した。作品のエピソード一つ一つはそれなりにおもしろいが、何か欠けている。

ほかにも、公衡「市井瑣聞——筆記小説二題」(『清明』八五年四月)に描かれる、離婚したいが周囲が認めない夫婦や、伝承だけで、実際に掘られていなかった井戸を、文革からずっと守ってきた老人。張宇「カバン」(『鴨綠江』八五年五月)や、「こそ泥と書記」(『奔流』八五年九月)に描かれる、秘密文書が入ったカバンを拾ったばかりに余計な心配をする下級幹部や、文革中の盗みを支部書記に見つけた貧しい人民公社員。蔣子丹「温さんについて」(『文学月報』八五年六月)が描く、三〇年間唯々諾々と過ごしてきた役所の課長は、ある日突然怒ったり、上役に逆らったりして仕事を完成する。劉振華「悪夢」(『大風』八五年四期)

が描く、工場長への年始として、普段の八倍もの金でスッポンをやつと買ったのに、子供が指をかまれ、スッポンの首を切り落とさねばならなくなった夫婦、など。平凡な庶民の哀歎が仲々良く描かれている作品もある。

しかし敢えて言えば、文体だけが残つて、主体の熱が冷めている。社会や人生への嘆きから、話そのもののおかしさ、滑稽へ、作者たちは逃避しているようである。

三

高行健「花豆」(『人民文学』八四年九月)や張潔「テールライト」(『北京文学』八四年一〇月)などは、若者の生活には干渉すまいという形で、自らの老いを表明していた。王蒙は、「高原の風」(『人民文学』八五年一月)で、自らの老いに気づいて、若者の前途に乾杯したりした。

文革を体験した新しい作家たちが、短編では主流をなしている。

張承志が「北方の川」(中編、『十月』八四年一期)で、黄河に父を見、湟水に伝統を見、黒竜江に新しい世界を夢見る、元紅衛兵を描いたのは、作者自身の決着のためであつたろう。「ひとびとと社会が承認する位置」を、彼らは何かによって得なければならぬ。「北方の川」では、あの青春を賭しての奮闘を、今、粗野、力強さ、男らしさといったものとして甦えらさねばならぬと言うが如きである。やや作爲に満ちたこの作品には、しかし、必死な迫力がある。

文革を、何らかの意味で採り入れた作品は多い。何立偉「白い鳥」(『人民文学』八四年一〇月)のように、幼少期のそれに触れたものもあれば、文革で地位についた者が今なお権力を握っていることを描いた、艾平

「大ハマグリ」(『山東文学』八五年五月)。「毛沢東選集」の表紙をつけて「鏡花縁」を読んでいた独身女、陳世旭「烈女」(『小説導報』八五年八月)。農民が忌み嫌う牛殺しの仕事をさせられる知識青年の兄弟、李海音「青いユーモア」(『福建文学』八五年八月)。文革中の自分の体験から、阿城は「将棋の王」(中編、『上海文学』八四年七月)や「子供たちの王」(『人民文学』八五年二月)といったシリーズものを書く。

ここでは、任海傑「アオギリの並木」(『三月』八五年三期)という小小説(ショートショート)をとりあげよう。

紹介者が去ってしまったあと、女と男は、気まずい沈黙のままアオギリの並木道を歩く。一七年前、彼女はこの木を植えたことを思い出す。ふと、男が立ち止まって「この木も随分伸びたなア」と漏らしたことから、二人がかつて同じ日にここで、少年先鋒隊員(ピオニール)としてこの木を植えたことがわかり、「僕は悲嘆すべきじゃないんだ」と意気投合して、歩いて行く、という話である。

まことに、たわいのない、単純な話だが、それだけに一七年の歳月の重みが増してくる。小学六年の、一、二、三歳だった者が、今、三〇歳になろうとしているのだ。彼らは独身が多い。結婚という新しい人生に踏み切れないのだ。このままでは、新しい生活に適合できないのだ。何かを決着しなければならぬ。それは、張承志のように、猛烈な勉強、男らしさなどといったものかもしれない。あるいは、金や権力かもしれない。懐かしだが、普通の男女にとっては、任海傑のように、ひっそりとした、懐かしき歳月なのかもしれない。懐かしむに値する思い出が他者にもあることを確認しあえるなら、結婚に踏み切れるではないか。文革世代が、新しい生活に適合するために、それぞれが自分なりに、自己納得をしていることを、この「アオギリの並木」は示している。

文革が、各自の中で対象化されており、それが普遍的になりつつあるのだ。例えば、「不良女は、『四人組』よりもっと反革命的なよ」と、劉漢一「毛深き髭」（『鹿鳴』八五年九月）の中で、かつて不良にかどわかされたことのある、三〇歳の独身女は言う。このことばは、不良の実態がどうなのかという事実問題ではなく、「四人組」が既に絶対的な悪ではなく、相対的価値の一つにすぎなくなっていることを公言しているが故に、意義深い。「四人組」は、歴史の一事象となりつつあるのだ。文革とて、その道をたどるのは当然であろう。

四

辺境の自然や野性動物への注視は、王鳳麟「狼の出没する谷」（『人民文学』八四年九月）や白雪林「青々とした峡谷」（『草原』八四年一二月）などにあつたが、八五年になるとますます少なくなり、かわつて荒誕な話が多くなる。

チベットの生き仏のお告げが、自分の小説の筋をつくりであつて、自分の小説の主人公を探して道を歩いていると、穴に落ち、そこで、ロサンゼルス・オリンピックの開会式の歓声を聞くといった話で、不思議な魅力を持つ、扎西達娃「皮ひもに結ばれた魂」（『西藏文学』八五年一期）や、南国の山寨に、生まれて初めて来たのに、どうも一度見たような気がするうえ、あの角を曲ると何があるか知っているとといった変な気分の中に、村人も私をよく知っていて声を掛けてくる。村人がある男と間違えていることがわかり、その男になりすます、韓少功「帰りなん」（『上海文学』八五年六月）。昔、永寧寺の瓦作りにかり出された男が、栄養失調で死ぬ前に、瓦に自分の名を焼き付けた。魂が、瓦の行方を探して洛陽の都を飛びまわり、寺のてっぺんにあるのを見つける。今度は、それを人に知ってもらいたいと願ひ、後世の発掘調査によって願ひが実現

すると、遊魂は幻化したという、成一「朝霧」(『山西文学』八五年八月)。また、何十年ぶりに復活した内蒙古の火祭りを、大雪を予測してやめさせようとする、元知識青年の氣象観測員。この少女と族長の娘、そして族長の片腕の若く遅い男という三角関係をからませた、路遠「火祭り」(『草原』八五年九月)もある。

三角関係の話は、八五年の中編、短編を特色づけると言ってもいいくらいに多い。軍隊ものにも、大きなウエイトを占めて出てくる。劉亞洲「一人の女と一人半の男の話」(『文匯月刊』八五年二月)と王中才「黒馬」(『山東文学』八五年七月)がそれで、決定的行動がとれない兵士の影になっている。これは、王中才「最後の塹壕」(『鴨緑江』八四年十一月)と、大きく違う点である。

改革を扱った作品は、陳冲「小さな工場に大学生が来た」(『人民文学』八四年四月)以外、特に見るべき作品はないようだ。この陳冲の作品として、改革に成功するのではなく、大学生が世情を知らず生硬なままなので、失敗するのである。

史鉄生「この世に生まれて」(『三月風』八五年六月)は、先天性軟骨組織發育不全の娘が、自分の異常に気づいたことに動揺する若い夫婦を描く。娘は四歳で、保育園で馬鹿にされる。程海「塗師」(『延河』八五年七月)では、塗師として腕は確かだが、つい仕事に熱中してしまう聾啞の男が、妻に浮気されて、自分から身を引く話である。

若者を扱った作品にも、見るべき作品はないが、生活を観念的に把握し、現世に反抗的な都会の若者の心理をとらえた、徐星「主題のない変奏曲」(『人民文学』八五年七月)と、若い文盲の犯罪人の過去を調査し、文革の若者への影響を述べる。劉峰軍「死刑執行立会い人のメモ」(『青年文学』八五年六月)が注目される。

五

邵振国「麦刈り人夫」(『当代』八四年三期)は、陝西の農村へ、更に奥地の山村から出稼ぎに来る男たちのことを描く。農村の生活は、相変わらず厳しい。個人請け負い制は、若者を大きな労働力として解放しているが、彼らは、父たちのように土地や肉体労働にしがみついてはいない。周宗奇「さわやかな沙水河」(『山西文学』八四年四月)の若者は、運送業に走る。また、李逸民「頭の上がらぬ人」(『山西文学』八五年一月)などには、家長制が崩れていく様子が描かれる。彭見明「老銃」(『朔方』八五年四月)では、説明的でない文章によって、古き良き伝統ある生活の終焉が描かれている。

そのうち、田中禾「五月」(『山西文学』八五年五月)は、大学院に進めず、農村の教師になろうと帰宅した娘香雨を通じて、労働力弱小の農民の現状を描く。香雨は、農村の娘であったのに、今は農作業に一日として耐えられない。妹は、敵意を示し口をきかない。弟は、賭事で帰宅しない。肉体を酷使し勤勉に働くのに、年とった両親は、請け負い制の下で一層貧困になっている。善意や誠意だけでは、どんどん落後せざるをえない農村を、妹は、同級生であった男と組んで、トラクターに乗って見捨てる。香雨は、学んだ理論と現実を必死に統一しようとするが、この敵しい現実によって、自分が農村にいかは無価値な存在か思い知らされる。

香雨の妹のような若者が都会に出ると、「哥兒們(コールメン)」になるのであろう。正業につけず、金儲けの仕事に口を出し、手をつける、ブローカーとなる若者たちを「哥兒們」という。彼らの活躍は、一方では、社会の円滑な運営を支えることからきており、都市では、徐々に組織化され、強化されているようだ。

梁晓声「潰瘍」(『文匯月刊』八五年八月)では、作者自身が出て来て、その世間知らずを、「哥兒們」に嘲笑される。母が過労で倒れたというので、作家である私が実家に帰ると、家が一層狭くなっている。弟たちが結婚したのだ。環境さえ良ければ治るといふ、精神を患う兄と母のために、せめて一問欲^{ひとま}しい。この時出現したのが「哥兒們」である。彼らによれば、「借家権」というのがあること、違法だが問題ないこと、など、驚き呆れることばかりだ。私は、彼らの手引きによって、八〇〇〇円で「借家権」を手に入れようとする。

梁晓声のこの作品は、彼の「父親」(『人民文学』八四年一月)と同じで、後半、私の自尊心や正義感などが出てきて、つまらなくなるのだが、前半の、作者の私が、社会のカラクリを知っていちいち驚き呆れるところにはリアリティがある。おかしさもそれ故生きてくる。戯作なら戯作らしく、作者は低い視点に徹底した方が良いのだ。

張枚同、程琪「国境線」(『人民文学』八五年七月)で、ある創作組長が「無責任な若造と元の右派、奴らが何を考えてるかわかりやしない」と口走るが、言い得て妙である。

七 一九八六、八七年の文学情況

八六年と八七年という二年間の作品を同時に論ずるのが、今回ほど難しいことはなかった。言うまでもなく、八七年一月に胡耀邦総書記「辞任」という政変があったからである。俗に「老人パワー」の爆発として受けとられたこの事件は、保守と改革の各種の要素が一举に象徴的に噴出したもので、文学芸術（文芸）というイデオロギーの分野では比較的穏やかであった規制が、八七年から再び強化されることになった。短編小説や中編小説にも、そのことが微妙に影響し、八六年と八七年とは大きく異なる雰囲気が生まれているのである。

一 馬烽らの小説

八七年四月の『人民文学』誌に、馬烽の「葫蘆溝今昔」が載る。この短編は、新聞記者である私が、金持ち村に変貌した典型として葫蘆溝、通称苗全茂村を訪れる話である。

苗全茂村は以前、乞食村と呼ばれるほど貧乏村であったが、苗雨田が村主任となってからは、またたく間に金持ち村になった。私が村に着くと、雨田は、体験報告をするようにあちこちから呼ばれて村に腰を落ち

着かせていられない。かわりに、雑用係の苗爺さんが、資料室に案内する。私は、雨田が作った果物乾燥工場が村のドル箱であることを知る。ひとり、果物を供給する果樹園に行くと、気むずかしい爺さんがいた。爺さんは私に、当時の主任苗全茂が村人を指揮して荒地を開墾し、果樹園を作ったこと。「大寨に学べ」という運動に呼応して人海戦術でやったが、山津波に襲われ、爺さんの息子が犠牲になったこと。県から収穫量を割り増しして報告するようにいわれたのに、全茂は拒否し、県の補助金が打ち切られ、乞食まで出たこと、などを語る。全茂も山津波で子供を亡くしていたので、この爺さんが全茂その人かと思っただが、実はそうではなかった。

雨田が村主任となつて最初にしたことは、果樹園開墾で犠牲となつた者を慰勞し、開墾に献身した人びとを顕彰する石碑を建てることであつた。私は、この村に一泊するよう声を掛ける雨田に、全茂に会わせてくれと言う。雨田は笑つて、私のために茶を入れている雑用係の苗爺さんがその人だと言うのであつた。その晩私は、苗爺さんの質素な部屋と一緒に寝、話を聞こうとする。爺さんは、答えるべきことを簡単にしゃべると、ぐうぐう眠つてしまふのであつた。

この作品には、前代の粒粒辛苦を、次代が発展させ享受している様子が描かれている。現在の繁栄が過去の努力の成果であることを伝えるが、それだけでなく、次代の者がそのことをよく承知しており、また、前代の苦勞は次代が幸福を享受するためであることを、前代の者も承知しているのである。老いも若きも、双方の勞をねぎらい、双方の力を認めあつている美しさが、この作品のテーマである。

過去（古いもの・老人）がこのように現在（新事物・若者）にいかにか効力を發揮しているか気づかせる構成は、馬烽が一貫して持つていて、さらに、これまでの五〇年代、六〇年代の「人民文学」といわれた作品

が持つていたパターンである。

また、葉楠「幸運を祈る」(『文匯月刊』八七年四月)は、老山と思われるベトナムとの国境前線基地の話である。

基地へ大砲を運ぶトラック運転手の私は、途中で一人の女、黒妮を乗せた。彼女の言うところによれば、偵察兵の恋人が心変わりしたので、自分のことは諦めてくれと手紙を寄越した。戦区には方蘭という女がいる。そこで、真相を確かめに行くのだと言う。

私は戦区撃鹿場に着くと黒妮を下ろし、方蘭から、手紙などの入った慰問袋を受けると、「不道德な女め」と言い残して前線に向かった。前線基地では、砲兵たちの歓迎を受け、話をせがまれる。そこで方蘭の不道德をなじると、兵士たちの顔色が変わり険悪な雰囲気になった。曹長が皆を鎮めて、私に話をする。方蘭は兵士たちのため洗濯など身のまわりの世話をし、手紙を読んでは返事の仕方につき相談に乗ってやり、代筆したりしている。負傷したり失明したりする兵士がいる中で、どんなに慕われ、好まれていることか。戦区で、なくてはならない存在となっていることを語る。

私が敵軍の砲火を避けて、撃鹿場へ戻ってみると、黒妮は片手片足を失った恋人の傍にいた。息子を犠牲にした老婆を送るよう方蘭に言われた私は、彼女に対して、尊敬の念をこめて敬礼するのであった。

この作品にみられるように、私がある人を誤解し、他の人びとの話によって誤解がとけてみると、ある人は人民に奉仕する立派な人物であった、というのも、これまでの「人民文学」のパターンではなかったろうか。

馬烽(山西省文連主席)といい葉楠(作家白樺の弟)といい、ともにかなりの名望ある老作家である。彼

らの作品がこれまでの「人民文学」のパターンと同じであっても、それは致し方ないことかもしれない。むしろ、そういう効果を予測して彼らに作品を書かせた情况があったのだと言った方が正確かもしれない。馬烽や葉楠が使用した題材は、どれも事実であろう。だが、所与の理念から、ディテールの事実にはリアリティを頼って、一つのお話を語るのも、これまでの「人民文学」のパターンであった。こういう意味で、八七年は保守的な傾向が主流を占めたといえる。

王蒙の「烙餅」(『小説界』八七年四期・小小説)は、この間の事情を風刺的に突いているような気がする。守誠という名の河北生まれの男が、四〇歳の誕生日に、何がなんでも烙餅を食べようとする。前妻が交通事故死して以来、三年間というもの、湖南生まれの後妻が作るのは、米と魚の食事だ。妻も子も、守誠が烙餅を作るのに反対だ。まずいし、腹をこわす、と言う。しかし彼はどうしても食べたい。妻の火加減への忠告にも耳を貸さず、ひとりで焼き、皆に食べさす。言うまでもなく、烙餅は失敗作だった。でも家族の者は黙々と食べ、腹が痛いとも言わなかつし、こつそりと胃散を飲むこともしなかつた。しかし、これ以来、何を食べても楽しさが失われてしまった。

自分の三六年間の食習慣という過去にこだわりの、妻子の意向を無視して、異常な執着心で烙餅を食うことを強行してみたものの、しらけた空気が残っただけというのは、一月政変の強行と、その後の人びとの感情を象徴しているのではないだろうか。

二 王蒙らの活動

前回において(三一七頁以下)、三人の作家協会副主席がそれぞれの方向に進んでいる見取り図を描いた。

そのうちの一人劉賓雁は、八七年一月末に党除名となった。彼は八五年の「第二の忠誠」に引き続いて、上海海運学院の指導者が権力をもとに知識分子を迫害したことを「未完成の埋葬」(『報告文学』八六年一月)に書いた。事実を事実として追及して、事実を再現しようとする試みは、権力者によって力づくで挫折させられたと言った方がいいのかもしれない。

陸文夫は、八六年は外国へ行ったりして、作品が少ない。八七年に「清高——横丁人物志20」(『人民文学』五月)を発表する。

ある横丁の人びとから尊敬されている小学校教師汪百齡の結婚話である。機械組立工の二男夫婦と雑貨店をやっている三男とが、兄の百齡に相手をつつけてやろうとする。新しい洋服に着替えさせたり、家を建て替えたりしてやる。ところが紹介された女は、一人は遊び好きで、小学教師の給料では家計がもたない。次の女は高尚ぶって、話があわない。三番めは、家具や洋服だけに関心のある女であった。こうして汪百齡は、清高(潔癖で孤高なこと)であろうとするわけでもないのに、清高のまま暮し続けざるをえない。

この作品からは、小学校教師がどの辺に社会的位置を占めるか、とか、若い女の結婚観といったものがわかる。風俗がとらえられているが、平板な感想が残る。ただし、清高にならざるをえない小学教師に、陸文夫の心情がたぶん投影されているのであろう。

八六年五月に文化部部長(大臣)となった王蒙は、なお第一線で作品を発表している。

二〇世紀の八〇年代に中国人は、コロンブスが新大陸を発見したように、アメリカを発見した。かくも満ち足りて、「自由」である場所がこの世に存在するものか、と。「輪下」(『人民文学』八六年四月)を第一とする王蒙のシリーズ小説「新大陸人」がこうして書き始められる。かつて五〇年代に、王蒙を含めた中国人

がソ連に新大陸を見出したように、八〇年代にアメリカに新大陸を見出す中国人を描くのである。

それと同時に王蒙は、「名医梁有志の伝」(『十月』八六年二期・中編)を書く。双子の兄梁有徳と弟の梁有志は、兄が色が黒くて活発、弟が色白で秀才といったように相反する性格である。この二人の半生を描くことは、二つの相反する視点をもって、中国解放後の歩みをふり返ることにほかならない。

だが、八七年になると、たとえば「虫影」(『收穫』八七年六期)のように、個人の人生に関心を寄せるようになっていく。

五〇歳を既に越えたエンジニア李忠強は、今なお黒髪がふさふさしている。この髪が黒いことを、いつも他人が取り沙汰しているように李忠強は感じている。ある朝、体操をしようとして何か冷たいものが首から腹に駆けぬけ、虫の影のようなものを感じた。それから腹が下り始めた。彼には局長になるという話があるが、李忠強によると、年齢不相応の黒髪が邪魔をして、うまくいきそうにない。そこで、中日友好病院へ検査しに行くが、もちろん異常はない。ところが五日後、また冷気に襲われた。今回は下痢が激しく入院した。二五キロも痩せ、髪も抜け白くなってしまった。この間、局長には他の者になってしまった。二年ほどBNW養毛剤を使用して、髪がまた生え始め黒くなってきた。李忠強は、工作機械以外にはもう昇進などに関心を持たなかった。

この作品は「BNW養毛研究所のための広告小説風に」と副題がついている。昇進話がちらついた五〇過ぎの男の心の揺れを描いたものと思うが、実のところ、何を描いたのか、なぜこんなことを書くのか、よくわからない。せいぜい言えることは、上述の「烙餅」もそうであったが、人生とは何であるか噛みしめようとする時が人にはあつて、そういう時に直面した男の(もちろん女でもいい)焦りが描かれているのである。

う。そこには、中国とか中国人といった大情況を見ずえる目とは違った醒めた目が必要であろう。老いの前には、社会的付加価値など色褪せるであらうから。ともあれ王蒙には、精神的な老いとうものをじつくり見つめる余裕みたいなものが出てきたと言えるだろう。

王蒙と同世代の作家では、三歳若い張潔が「彼は何の病か」（『鍾山』八六年四期・中編）を書いたが、八七年は沈黙している。二歳若い諶容が八六、八七年と活躍している。

諶容「十歳削減」（『人民文学』八六年二月）は、文革で無駄にした一〇年を各自の年齢から差し引くことで償おうとする話だが、当然のことながら、大喜びする者もいるが、困って文句を言い出す者もいる。「生前と死後」（『人民文学』八七年四月）では、自分の葬式がどんな風に催されるか知ろうとして、死んだと偽った男の話である。「同窓」（『北京文学』八七年六月）は、三〇数年前の旧友に会ったが、共通の基盤が失くなっていて、それぞれ独自の道を歩んでいることを確認する話。「電話」（『中国作家』八七年三期）では、夕食後趙爺さんがご機嫌でひとりしゃべりまくる。隣近所や同僚の誰それが何したか、にしたと。そこへ電話がかかってくる。張さんが退職して寂しがつているから電話でもしてやってくれと、張の奥さんが頼む。趙爺さんは電話が終わると、そのまま倒れ込んでしまった。

上述の王蒙同様、諶容も老いとか死について凝視しようとしているらしいが、その主題にたえるだけの文体が無い。軽妙さをねらっているような姿勢が見えるだけに、なぜこんなことを書くのかよくわからない。

三 三〇歳代後半の作家たち

三人の副主席やその世代の作家にかわって、三〇歳後半の作家の活躍が目立つようになった。解放軍芸術

学院文学系の第一回卒業生三五名が八六年の七月に、中国作家協会魯迅文学院第八期卒業生四四名が八六年九月に出た。今後、こういった文学院出の作家が文壇の一翼をになうと思われる。もつとも表面的には、八七年は一月政変以来、少し鳴りを潜めているが、少し人名を列挙すると、次のようになる。()内の数字は生年である。

▽解放軍芸術学院文学系

李存葆(四六年生) 宋学武(四七) 陳道濶(五〇) 雷鐸(五〇) 李本深(五一) 錢鋼(五三) 王海鵠(女・五三) 張波(五四) 朱向前(五四) 莫言(五六) 何繼青(五七)

▽魯迅文学院

鄧剛(四五) 孫少山(四七) 趙本夫(四七) 趙宇共(四七) 聶鑫森(四八) 劉兆林(四九) 王蓬(四九) 葉之臻(四九) 賀曉彤(女・五〇) 魏繼新(五〇) 楊東明(五〇) 聶震寧(五一) 張黎明(女・五一) 儲福金(五二) 姜天民(五二) 朱蘇進(五三) 簡嘉(五四) 張冀雪(女・五六)

右のうち朱蘇進と莫言に少しふれよう。

朱蘇進は、八六年に「第三の目」(『青春』叢刊二期・中編)を書いた。台湾が目と鼻の先にある国境守備隊の話である。隊員の一人が台湾へ脱出し、「自由な台湾」への脱出をマイクで呼びかけてくる。隊員たちはノイローゼになり、ある班は瓦解するが、結局もとの班に戻るしかない。

この作品は、題材も新鮮だが、軍隊組織そのものを考えさせ、第三の目の存在による価値観の相対化がはかられていた。朱蘇進にはまた「こっそり話そう」(『解放軍文芸』八六年六月)という短編もあつて、父親と母親の違いを子供を育てる体験を通じて描く。

莫言は、「赤い高粱」（『人民文学』八六年三月・中編）で、祖父の時代の抗日戦争を描く。生臭いにおいを発するまつ赤な高粱畑で、祖父と祖母は愛し合い、敵（日本軍）と戦い、死んだ。聞き書きによりながら、人物が生き生きと動いていて、かなりの筆力がある。「蠅・前歯」（『解放軍文芸』八六年六月）も、莫言独特の生理的な臭いが漂い、そこに自在に生きる人物が描かれる。「歡樂」（『人民文学』八七年一・二月合刊・中編）では、五回も大学受験に失敗した男の憤懣が、「綠色」に象徴される現状に叩きつけられている。「猫のことごと」（『上海文学』八七年一・一月中編）では、自己の蘊蓄を大いに傾ける。新たな試みである。なお猫は八七年によく取り上げられた。

ついで言えば、八六年から中学生や高校生を扱った作品が流行する。主な作品を列挙しよう。孟曉雲「多感な年頃」（『十月』八六年五期・報告文学）、羅達成「少年少女の隠された世界」（『人民文学』八七年一・二月合刊・報告文学）、呉氷「中学生啓示録」（『清明』八六年四期）、肖復興「幼い恋」（『長編小説』八六年一・二月・長編）など。そして、張賢亮「お早よう、友達」（長編・発行禁止）が高校生の性心理を露骨に書き表しているとして押さえられた。また、教師の方にも目が向けられ、蘇曉康・張敏「神聖憂思録」（『人民文学』八七年九月・報告文学）などがある。

主に報告文学を中心とした一連の高校もの、教育ものは、特に男女関係や自慰などが関心を集め、張賢亮のように押さええられたりした。事実を事実として提出することも危険な方法であることは、劉賓雁の場合にみたことであつたが、そればかりでなく、事実を事実として提出するという単純な手法は、事実としての素材の新奇さを追う隘路に陥りがちになる。

その代表が馬健「舌まで出して歓迎するか空虚なるか」（『人民文学』八七年一・二月合刊）であろう。チ

ベットの風俗を興味本位にとりあげたと非難されたが、そういった点がこの作家になかったとは言えないこともないことが、「森林の白果」(『北京文学』八七年二月)にもうかがえる。グロテスクなものへの関心が強いのだが、それはガルシア・マルケスの人気と関係あるかもしれない。

馬健の作品を掲載したことで、着任後すぐ編集長を停職になった劉心武は、「バスエレジー」(『人民文学』八五年一月)や「王府井万華鏡」(『人民文学』八六年五月)を書いて、すっかり紀実小説(ノンフィクション)を定着させた。

農村ものでは、李銳「厚き大地」(『人民文学』八六年一月)、『山西文学』八六年一月、『上海文学』八六年一月)の、下放青年が呂梁山麓で味わう、農民からの余計者意識が注目に値する。また何士光「苦寒行」(『人民文学』八七年四月・中編)では、軽薄で無責任で見栄っばりの男が、何一つ成功せず村をたび出す話である。

八七年には殆ど沈黙してしまつたが、王安憶「小さな町の恋」(『上海文学』八六年八月・中編)は、彼女独特な汗の感覚を通して、男女の愛と憎しみを描いた。扎西達娃「ラサへの道」(『人民文学』八六年四月)は、逃れられない運命を描いて不思議な魅力を持つていた。張承志は回教のことを書いていて難解である。

余華「一九八六年」(『收穫』八七年六期・中編)は、文革開始二〇年、終息一〇年を意識して書かれた作品であるが、主人公が自分の体に昔の五刑を科す異常さだけが残る。林斤瀾は「十年十瘡」シリーズを書き始め(「ふるえ」『北京文学』八六年一月)、「黄搖」『上海文学』八七年二月)、心の傷が深いことを伝える。

日本軍の侵略を扱ったものの中では、高光「もがき」(『解放軍文芸』八七年七月)が、東北の小さな駅長となつた日本人の横暴とその事後処理に当つた日本軍の無法と狡猾さを巧みに描いていた。

四 その他

語句や文章が難しいばかりでなく、何を描いているのかわかり難い作品でありながら、捨て難いものを持つ若い作家の作品がある。

残雪(鄧小華)「山上の小屋」(『人民文学』八五年八月)、「ある太陽の日の阿梅の憂愁」(『天津文学』八六年六月)、「曠野にて」(『上海文学』八六年八月)、「あの世界における私の事」(『人民文学』八六年十一月)。多多「青い空」(『人民文学』八六年十一月)、「私が西安に着いた日」(『北京文学』八七年二月)。劉西鴻「自分の空」(『花城』八六年三期)、「あなたは私を変えられない」(『人民文学』八六年九月)、「チョコレート・ケーキ」(『小説界』八七年三期)などがそうである。

これらは、文体と文体に乗せられた感覚を感じとる作品で、そういう意味で、筋書きや題材に苦心する従来の作品とは違って新しい。現代的である。残雪の「ある太陽の日の阿梅の憂愁」のように、阿梅が入って行くと、台所で卑猥に笑っていた母と男が沈黙するが、ここには、現代の人と人との接触の猥雑な感覚が見事にとらえられている。また、劉西鴻「チョコレート・ケーキ」には、女が離婚して自立することの、まぶしさともどいさが描かれている。舞台は深圳らしい。若い男女の、新しがつたあぶなつかしい行動にも、理念で動かされているのではない生気が感じられる。この感覚が、人生は若い者にも厳しいのだと思わせるのである。

八 一九八八、八九年の文学情况

一 入選作品からみる概要

一九八九年八月、「一九八七—一九八八年優秀中短編小説賞」の入選作品が発表された。入選作品一九篇のうち、八八年度の作品は三分の一以下の六篇しかなかった。八八年度の短編、中編がいかにも不振であったか、これによってもわかる。

その原因として二つのことが考えられる。一つは報告文学（ルポルタージュ）の隆盛である。すでに八六年頃から報告文学は歓迎されていたが、対象の拡大と視点の多様さと深まりが次々と話題作を生み、八八年は報告文学の年といえるような様相を呈した。それらは単に現象を活写するばかりでなく、森林資源や土地の砂漠化など（徐剛「盗伐者たちよ、目覚めよ」『新觀察』八八年二期、麦天枢「移民中の西部」『人民文学』八八年五月）憂国の情にあふれた作品も多くなった。蘇曉康・王魯湘らによるテレビ・ドキュメンタリー『河殤』（第一集脚本は『人民日報』八八年六月二二日に発表）は、それらを集約したものといつてよかろう。

『中国の潮』報告文学賞が八八年一二月に発表されたが、一等一〇篇から三等まで計一〇〇篇が入賞作

となり、応募作品は一〇〇〇篇をゆうに超えた。いかに多数の作者と読者を吸収したかがわかる。

もう一つは通俗小説の隆盛である。推理小説からセックス物、アクション物などが、正式の販路を経ずに多量に出版され市場に出回った。独立採算性を強いられている出版機関が、こういった作品を争って掲載した。それが中間小説の出現をもたらした。王朔という若手の小説（例えば「悪ガキ」「収穫」八七年六期、中編）がそうである。プロローグなど怪しげな商売の若者を主人公に、社会の裏道での出来事をグイグイと粗いタッチで描く。「スチュワーデス」「半分は炎、半分は海水」など、珍奇な題材と道徳に拘泥しない人物の爽快さが大いに歓迎され、次々と映画化された。

二 民主化運動弾圧以前の作風

既成の作家王蒙は「サッカースターの奇妙な体験」(『人民文学』八八年一〇月、中編)を、思い切つて通俗的な小説に仕立てる。有名なサッカースターの身代わりにされた男の話である。この男のお尻にボールが当たり、それが唯一の得点となつて、試合に勝つ。そこでこの男が英雄になり、彼を称える歌やポスターができる。さらには、お尻の角度が何度であれば相手ゴールまでボールが跳ね返るかの研究会までできる。こういった荒唐な話を次々と繰り広げる。意外とリアリティがあるのは、中国や外国の風俗が巧みに取り入れられていることと、こうしたバカ騒ぎが文革中によく起こつた、大衆の動向とそれを引き回した革命幹部の行跡を下敷きに行っているからである。王蒙は、狡猾さにまざる純真さをこの小説で伝えるが、こういう作者の態度を中国では「調侃」(からかい)という。この態度は、夫婦となつた以上、お互い適当にうまくやるしかないということを、離婚するのは勇気がいることで、面倒だからしないのだと言いくるめて斜に構える、

諶容「離婚は面倒」(『解放軍文芸』八八年六月、中編)にも共通して見られる。

この傾向は、八九年まで持続していた。諶容「八八症候群」(『人民文学』四月)は、春節に同僚とマージャンをするが、一度もあがれない話である。調子の良い時も、気落ちした時も、口に出るのは文革時のスロ―ガンや『毛主席語録』の言葉であった。王蒙「初春のロンド」(『人民文学』三月)は、六〇年代に書いた恋物語を、もう一度「初春」と題して書き直す話である。実名の人物を出したりして、その時期ごとの世相を描き、「初春」の筋も変化する。

いずれの作品も、風俗をおもしろおかしく描いて、主人公たちの内実なき人生を伝える。思想も倫理も定着せず、何かに押し流されるままであつたという焦燥が作者たちを覆っていた。だから、現実に対処する際、せいぜいその一部に光りを当て、嘲笑してみせることしかできなくなつたのかもしれない。こうした無気力は、焦燥による倦怠と、人と人との関係の冷却、つまり他者への無関心とによって深まっていた。

劉心武が「白い歯」(『人民文学』八八年三月)で、ものを言うまいと決めて一言もしやべらないのに、上役にも同僚にも少しも怪しまれず何日も過ごせることを描いた。八九年の楊武昌「急診」(『三月風』二月、小小説)になると、精神に異常のある女が人形を急患と偽って病院に連れて来たが、医者も看護婦も平然と聴診し注射を打つ。単に無責任な病院というよりも、社会全体の無責任や無関心の深化を感じさせる。王安憶「風呂」(『東海』九月、小小説)は、風呂があるかと話しかける男の目的は何かと、あれこれ詮索して一人悩む話であるが、意思の疎通せぬ都会の、人と人との関係が浮かび上がる。喬典運「遺風」(『洛神』三一期)は、先祖伝来の良風である助け合いが、いかに欺瞞的ものかを描いて、思わず笑わされる。こんな山村でも、人と人との関係は変容してきている。一方、馬烽「黒闇の中の閃光」(『人民文学』六月)や康濯「一

○年一聚」(『人民文学』九月、中編)は、文革中の紅衛兵や造反派の中にも、心の通じあえた者がいたことを描く。人と人との関係が崩壊している現実を横に置いて、かつての良き関係を描くことを保守といつてもよからう。

三 民主化運動弾圧以後の作風

一九八九年六月四日、民主化運動が弾圧され、雰囲気さがらりと変わった。八月末、王蒙文化相が更迭され、賀敬之が代行になった。『北京文学』誌は、八月号から戒嚴部隊を称賛する報告文を掲載し、十一月号からは「中国の潮」報告文学をやめ、林斤瀾、李陀、陳世崇といった編集者の名前も消えた。もつとも、『人民文学』や『上海文学』『山西文学』などには、まだ変化が見られない。

中国作家協会(以下、作協と略記)副主席で、報告文学の作者として著名な劉賓雁は、八七年一月にすでに中国共産党から除名されていたが、これも報告文学の作者で『河殤』で有名な蘇曉康とともに、八九年一月、大衆的職能団体である作協からも除名されてしまった。反動団体「民主中国陣線」の発起に関与したことが理由である。作協規約第一四条に基づき、作協主席団が決議した。二〇名いる主席団の全員が出席し、賛成したのか等不明な点が多いが、一二月に中共中央が馬烽を作協党組書記、瑪拉沁夫を副書記に任命したから、この二人が主導的働きをしたことは間違いないからう。

一月一五日の会議で、主席団の決議に賛意を表明している康濯が、一九五五年の胡風批判と文芸報の関係を明らかにしている(『文芸報』一月四日—八日)。それによれば、毛沢東の突然の指示により、胡風は反革命分子となり作協から除名されたという。除名の際、呂癸という学者だけが決議に反対したという。

この経緯は、康濯より早く、林黙涵によって知らされていたが（『新文学史料』三期、『文芸報』一〇月二八日に転載）、この林黙涵は一二月に中共中央から、作協の上部組織である全国文学芸術界連合会（以下、文連と略記）の党組書記に任命された。副書記に孟偉哉、作協主席団の一員である徐懷中が文連党組メンバーに任命された。

この間、平然と作品を発表していたように見えるのが、阿成（王阿成、四七年生まれ）というハルピンの作家である。彼の「年の瀬六章」（『北京文学』八八年十二月）は、前出の八九年八月の「優秀中短編小説賞」に入賞した。「良き妓女」（『現代作家』一月）、「亀裂」（『北方文学』七月）、「梁家の物語」（『北方文学』一〇月）、「凶事」（『北京文学』十一月）など、いずれも山東から東北へ移住した、父や祖父たちの生きざまを描く。解放前の国民党支配から抗日、文革を経て現在に至るが、国民党だ共産党だという区別はない。政治は圧迫する事件として、苛酷な自然条件と同列にある。これまでの作品より、一層下の人物が主人公となっている。

阿成は、装飾を取り払った、殆ど文語体と称していい文体で彼らを描き、成功している。文語的な文体は、李国文「涅槃」（『人民文学』二月）、林斤瀾「氤氳」（『人民文学』三月）、阿城（鍾阿城）「結婚」（『收穫』四期）などに顕著で、優れた骨董品を觀賞する趣がある。范小青「顧家の後継者」（『鍾山』四期、中編）は、口語体で「新写実小説」という、作者の情意を排除した透明ともいえる文体によって蘇州の顧家の没落を描くが、今ひとつ感ずるものがない。方方「風景」（『当代作家』八七年五期、中編）や池莉「煩わしき人生」（『上海文学』八七年八月、中編）といった、現実への憤懣や愛着をこめて、芸術性を損ねるものも恐れず、現実と生々しく切り結ぶ躍動感がある作品は、八八、八九年にはなかった。作家たちは、巧緻な技術品制作に

走り、煩瑣な現実には背を向けてしまったように思える。

四 その他

『人民文学』三月号が小説特集として、二三篇の短編を載せた。すでに触れた以外の作品で、目についたものをあげよう。

馮徳英「西小地」は、台湾から故郷に錦を飾った社長が、四〇年も前に、ここ西小地で革命家の家族を生き埋めにしたことがあるので、土を掘るシャベルの音にうなされる話である。これほど露骨に華僑への反感を表現した作品もめずらしい。張潔が「最後の高み」で、飼い主に死ぬ姿を見せぬ猫のことを描いて、死を感覚的にとらえた佳品を発表している。蘇童「儀式の完成」は、古伝説に引き込まれて死ぬ男を描いて、恐さを感じさせる。査建英「ローザとジョーに献げるレクイエム」は、ニューヨークでの留学生の話だが、都会生活の孤独が見事に表現されていた。作者はコロンビア大学で比較文学を学んだ女性だそうだ。ついでに、慶応大学で研修している蔣濮にも触れておこう。「何処から来たかは聞かないで」(『上海文学』八八年一〇月、中編)は新宿を舞台に就学生の苦悩を描き、「東京には愛がない」(『收穫』五期、中編)は、六本木を舞台に離婚を描く。彼女たちのような作家が活躍する場合は、一時的になくなるであろう。

このほか、莫言「お前の行為は恐れを感じさせる」(『人民文学』六月、中編)は、新しいものに追われて、大事なものを失わざるをえなかった同級生の話である。猥雑な言葉や表現の中に確かさがある。劉震雲「役人世界」(『人民文学』四月、中編)は、県から区へ昇進した党幹部の話であるが、彼らはサラリーマン化して、思想性も倫理性も感じられない。

裴志勇「舞台祝い」（『人民文学』七月）は、文化村として表彰され、テレビを貰うことになった村で、芝居をやることになった。芝居興行の安全無事を祈って、縁起物の鐘馗が井鉢を投げて砕く。いわゆる焙烙割ほうろくわりである。ところが砕けなかった。そこで村長は犬を犠牲にするよう命令する。村の男たちが、いやがる男から獵犬を取り上げ血祭りにする。翌日、舞台の犬の血はいくら拭いても消えなかったという話である。懿翎「冬のオルガン」（『文芸報』七月八日）は、町から下放した少女が、公社の農業中学へまわされる。ある夜、オルガンを聞いて興奮し、遅くまで歌いながら、ストーブに一週間分の石炭をくべてしまった。夜、過熱から火事になり、仲良くなった地元の娘からもバカにされて唾を吐きかけられる。

友達からも見捨てられ、絶望して崖から身を投げるこの少女の心情に、六月四日以後の若者の心情が反映されているような気がする。